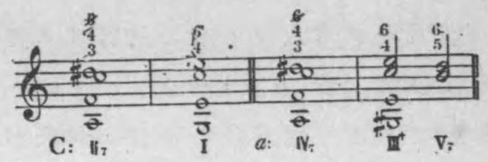
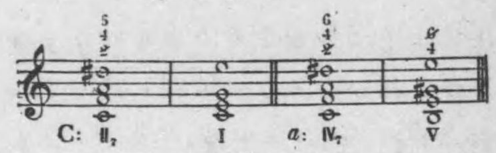
第二轉回

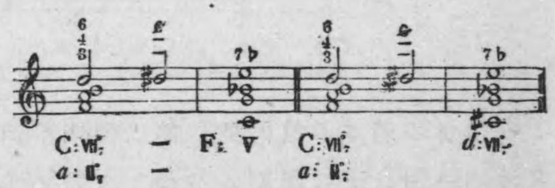


第三轉回

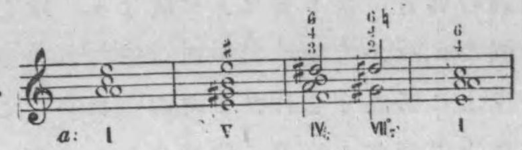


附言一　變化したる音の進行は常に上行するを以て原則となし，それに關することは既に述べたる所なれども玆に再び次の二項を反復補足せん。

1.　變化したる音の前に變化せざる自然音を存する場合には，變化したる音は常に必ず上行せしむべし。

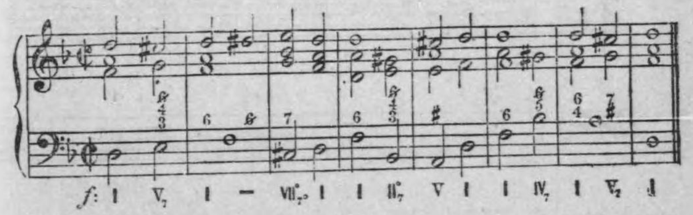
248.


2.　變化したる音の前に變化せざる自然音を存せざるときは，變化したる音を下行せしむることを得。されど斯る進行は不自然的·强制的にして良好の結果を齎さざるものなり。

249.


附言二　增六の和音は十八世紀以前に伊太利に起源し使用せられたる和音なりとの故を以て之を伊太利的六音の和音とも稱せられ，この和音を表はすには $\flat\!6$ に代ふるに 6+ を記載する方法をも用ひらる。而して增三四六の和音は之を佛蘭西的六音の和音とも稱せられ $\begin{smallmatrix}\flat\!6\\4\\3\end{smallmatrix}$ の代りに $\begin{smallmatrix}6+\\4\\3\end{smallmatrix}$ に依つて記載し，增五六の和音は之を日耳曼的六音の和音と稱せられ $\begin{smallmatrix}\flat\!6\\5\\3\end{smallmatrix}$ の代りに $\begin{smallmatrix}6+\\5\\3\end{smallmatrix}$ に依つて記載することあるものとす。

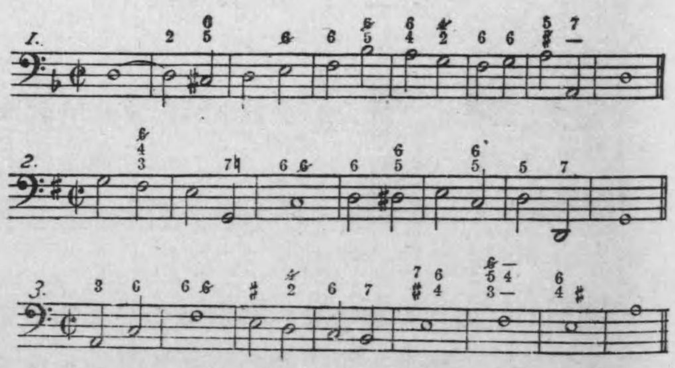
第二十五例題

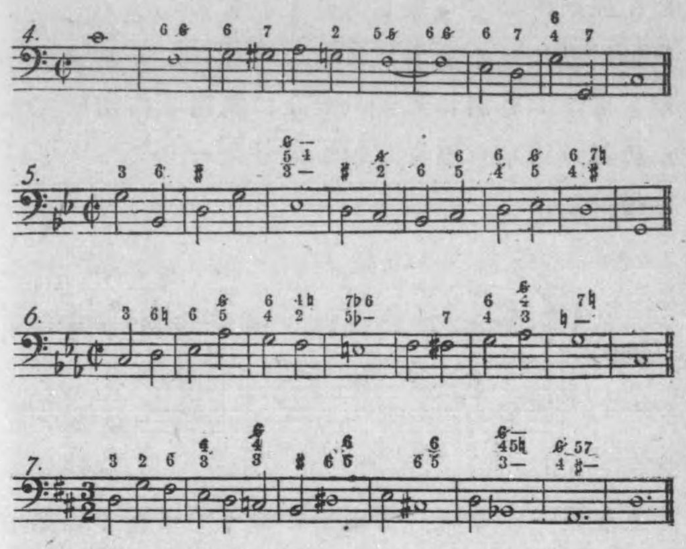


一小節の三四六の和音は〜短調の七の屬和音の第二轉回にして，低音上第六度の音の上昇を示せるは

ヘ短調の導音に當る音なるが故なり。增三四六の和音と誤認すべからず。二小節の第二の和音はヘ短調の一度上に構成せられたる增六の和音にして，低音の六度上の音たる高音に位置せるニ音の一半音上昇せるを見るべし。この和音の解決は本章第三節に述べたる正規によれるものなり。四小節の第二の和音は一小節の第二の和音と異なれる增三四六の和音にして，ヘ短調の二度上に構成せられてその屬和音に解決し，六小節の第二の和音はヘ短調の四度上に構成せられたる增五六の和音にして，其の解決は並行五度の進行を避けんがため直接その屬和音に進まずして，中間に四六の和音を挿入せるものなるを見るべし。（本章第四節並に第五節參照）

第十六課題





第十三章　轉調

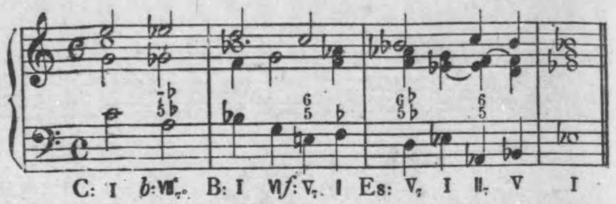
或る調より或る他の調に轉移するを轉調といひ，轉調によりて樂曲に變化と抑揚とを與ふることを得るものとす。轉調には

1. 急遽に現出し僅に一時的にして直に逃れ去るものと
2. 相當の豫備によりて或る調に移り，その調の和聲を長く支續するものと

の二樣あり，前者は簡易なる方法によつて轉調を行ひ得るものなれども，直に新調より離れ去るが故に

全く經過的にして確定的のものにあらずといふことを得。之に反し後者は種種の方法により漸進的の豫備を用ひて新調に入り，十分に新調を確認せしめ以て新調の結尾に至らしむる確定的のものなりといふを得べし。

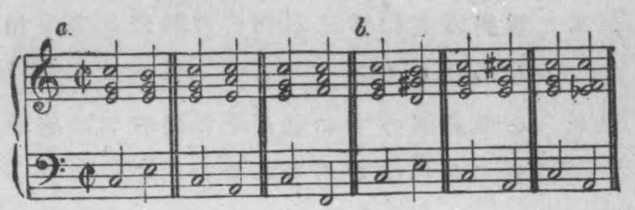
250.



上例の一小節幷に二小節にありては全く經過的轉調をなし，三小節に至りて玆に確定的のものとなり，最後に到達せんとする調に固定せるものなるを知るべし。この例はハ長調よりその調に關係遠き變ホ長調たる新調に達せんがために，經過的轉調を利用し順次接近することにより其の目的を果たしたるものにして，佳良なる進行法をとれるものとす。

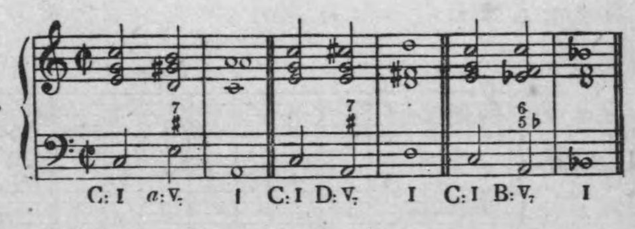
轉調は從來屬せし調の和聲を拋棄し，新調に屬する和聲の結合を行ふことによりて構成せらるるものなり。

251.



a三種は何れもハ長調に屬する和音として之を知覺するのみなると共に，b三種の第二の和音は何れもみなハ長調に屬せざる和音なることも，亦明に之を認知するを得べし。然しbの各第二の和音は一の新調に屬する主和音たるにあらずして，轉調せんとする調の主和音以外の和音として感受せらるるものなり。即ちこの第二の和音によつて或る何れかの調に向つて轉調せんとする歩を進めたるに止まるのみとす。

252.



上の連合に於て一の新調の主和音に到達せること明瞭にして，ここに轉調を確定したるものなり。これによりて轉調にありては

1. 新調の主和音は小節の強部即ち第一拍に存するものなること

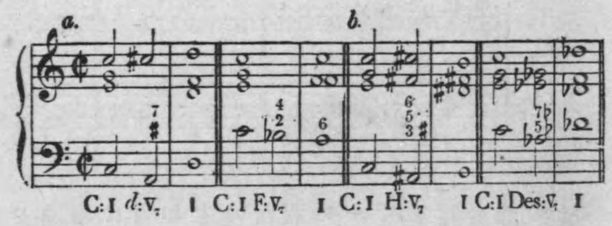
2. その新調の主和音は七の屬和音の終止的解決としてあらはるるものなること

を歸納するを得たり。

第一節　七の屬和音による轉調

或る一の調の主和音より多くの調の屬和音にも進行するを得るものなれども，この兩和音の連合にありてその共有音を同一の聲音部に保たしめ且つ正當なる聲音の進行を得たるに拘はらず，多くは其の結果に於て鋭く然かも强制的卒然的の感を與ふべき良好ならざるものを生ず。斯る結果は其の兩調間に同族的關係を有せざる場合に起るものとす。下圖aの自然的なるに反し，bの强制的なるが如き即ちこれなり。

253.



同族的關係を有する調とは共有する數個の音を存する兩調を名づくるものにして，普通この兩調を關

係調と稱す。關係調は長調にありてはその五度·四度，これらの關係短調及び自己の調の關係短調にして，短調にありてはその五度·四度これらの關係長調及び自己の調の關係長調なり。例へば

ハ長調の關係調は

1. ト長調（ハ長調の五度）　2. ヘ長調（ハ長調の四度）
3. ホ短調（ハ長調の五度の關係短調）　4. ニ短調（ハ長調の四度の關係短調）
5. イ短調（自己即ちハ長調の關係短調）

の五種にして，

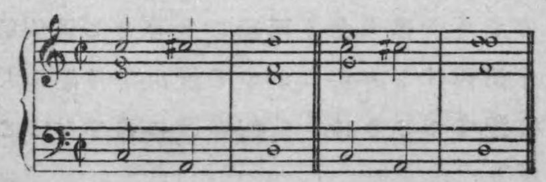
イ短調の關係調は

1. ホ短調（イ短調の五度）　2. ニ短調（イ短調の四度）
3. ト長調（イ短調の五度の關係長調）　4. ヘ長調（イ短調の四度の關係長調）
5. ハ長調（自己即ちイ短調の關係長調）

の五種なるが如し。而してこの五種の中おのづからまた親疎の別ありて，1 2 及び5は最も近き關係を有し，3及び4はこれに次ぐものとす。

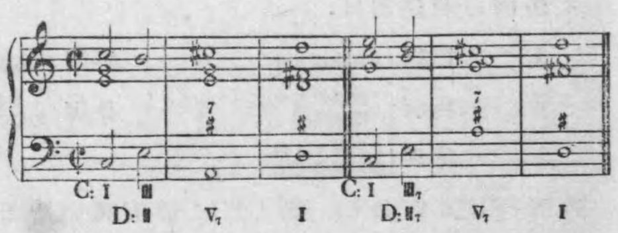
今ハ長調の主和音に直接ニ短調の七の屬和音を結合し，然る後ちニ短調の主和音に解決せしむべし。

254.



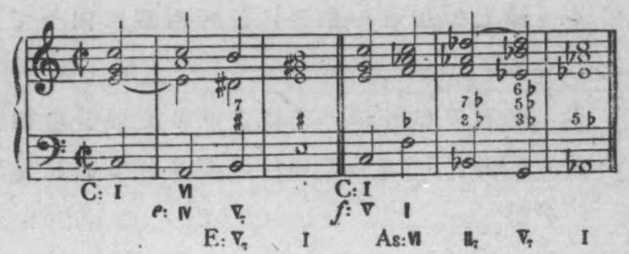
この結合に於て吾人に何等強制的の感を與ふるものあらざるは，ニ短調の主和音はハ長調の二度上の三和音に等しくして，ハ長調と同族的關係を有する所謂關係調なるを以てなり。然るに之に反し若し第二百五十五圖の結合の如く直接にニ長調に解決せしむるときは——長短兩調の七の屬和音は同形なるが故に——ハ長調に保屬せられざるニ·嬰へ·イの三和音となり，それがために吾人に鋭剛の感を與ふる結果を生ずるに至るべし。

255.



然るに今若し第二百五十六圖の如くハ長調の主和音と七の屬和音との中間に或る一個の三和音を挿入し，それに依つて兩調に同族的關係を保たしむるときは，ここに自然的のより良き結果を生ずるに至るものとす。斯の如く兩調に共有せる同族的關係の和音を使用する方法によつて遙か遠く離れたる調に順次接近するときは，種種の調に轉ずることを得るものなり。

256.



七の和音の自由なる解決によつて轉調を行ひ得ることは，轉調の一の方法として忘るべからざる所のものなり。初學者はこれを行ふに方り常により良き進行たらしむること，及び急遽に轉調を起さざることに注意すべきを要す。

注意 二個の樂曲の短き中間奏部にありては突然の感を起さざらしめずして，成るべく速に轉調せしむるを要することあるものなり。中間奏部とは異なれる調より成る二個若くはより多くの樂曲を連續して演奏する場合に，奏曲の全體に聯絡を保たしめ聽者に滿足の感を與ふべき短かき樂節をいひ，通例四小節を下らざる長さを以て可なりとするものなり。

第二節　減七の和音による轉調

或る調より或る他の調に向つて敏速に且つ容易に轉調する主要なる方法の一として減七の和音を使用す。

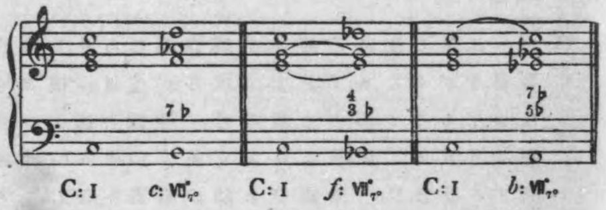
1. 減七の和音の第七音は豫備なくして自由に進行するを得

2. 減七の和音の解決は長短兩調に向つて許容せらる

3. 減七の和音は一或はより多くの音の四分音階的の變換によつて種種の異なれる調に進行するを得

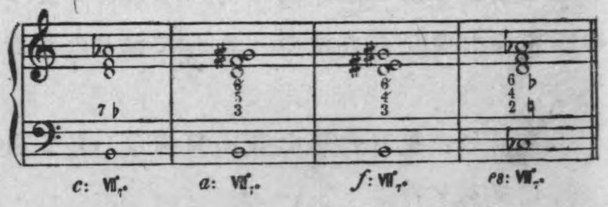
減七の和音は上に擧げたる如き特徴を有するものなるを以て，之を利用するときは容易に各種の轉調を行ひ得るものなり。今ハ長調の主和音より直接にハ短調·ヘ短調及び變ロ短調に屬する第七度上の減七の和音に進行せしむべし。

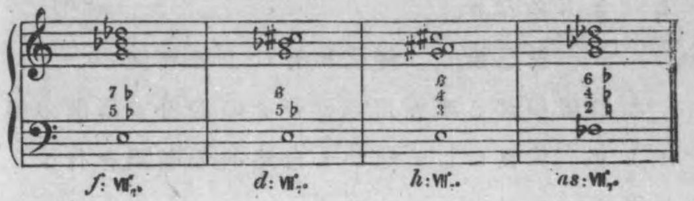
257.

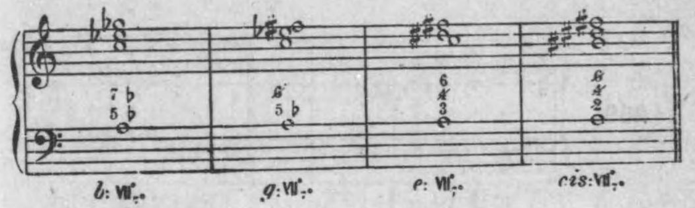


この三種の減七の和音は四分音階的の音の變換によつて，各四種の音階に配屬せるものなるを知るべし。

258.

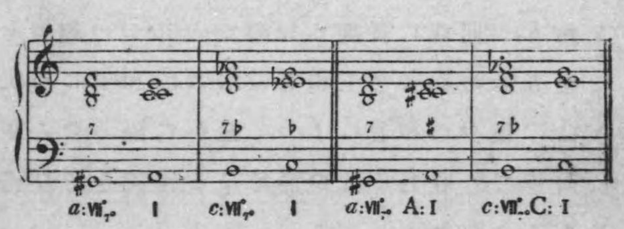






これによつて見るときは結局短調に於てすべて十二種の轉調を生ずるを知るべし。而して減七の和音の基本の位置及び其の轉回は短調の主和音に解決し，同時に又その短調と同高度に構成せられたる長調の主和音に解決するを得るものなり。

259.



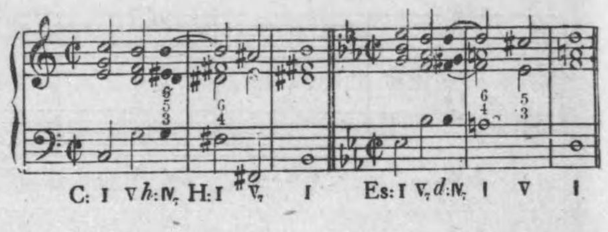
故に減七の和音による轉調は短調に於ける十二種以外に，更に長調に於ける十二種の調を加算し得ら

るべきものなり。

第三節　變化和音による轉調

七の屬和音と增五六の和音との四分音階的の變換により，佳良にして然かも自然的の轉調を行ふことを得るものなり。

260.



上例に依つて今ここに

1. 七の屬和音は增五六の和音と全く同樣の響をなし
2. 四六の和音は小節の强部に位置すべきものなること

を知り，同時に長調と短調との二つの和音を使用して增五六の和音を主和音の四六の和音に解決するときは，僅少の和音によつて遙かに隔りたる關係の調に向つて，容易に且つ滿足なる轉調を行ひ得るものなることを知る。

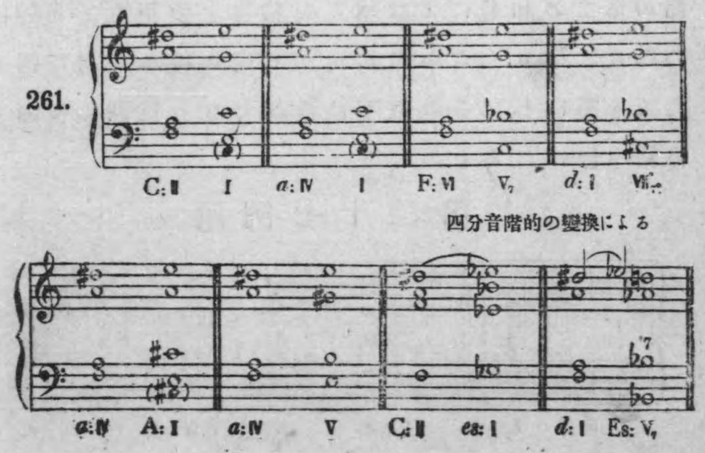
四六の和音の小節の强部即ち下拍部に現はるるときは終止の感を顯著ならしむるものにして，この和

音の現出により一般の場合には轉調の行はれしを思考するを得るものなり。而して四六の和音に次續して屬和音を現出せしめ，轉調を完結するを普通とす。

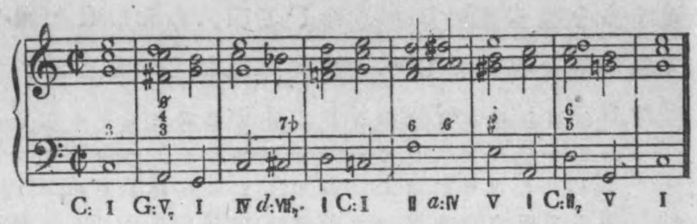
注意　四六の和音の中介によりて構成せらるる終止は三拍子にありては第一拍の强部に來るべきものなれども，また第二拍上に存せしむるを得るものとす。而して四六の和音の上拍即ち弱部に現出したる場合は，其の所屬調を確實に表にすことなく，經過的のものとしてすべて他の三和音と同樣に處理せらるべきものなり。

增六の和音も亦轉調を行ふに使用せらるるものにして，一の增六の和音は四個の種種の調に屬するものなることは，第十二章第三節二百三十四圖に述べし所なり。增六の和音に於ける解決幷に進行の一班を示すべし。

261.

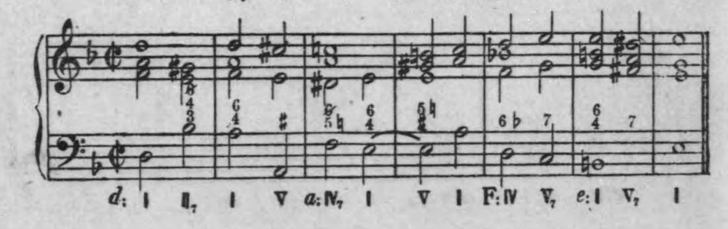


第二十六例題



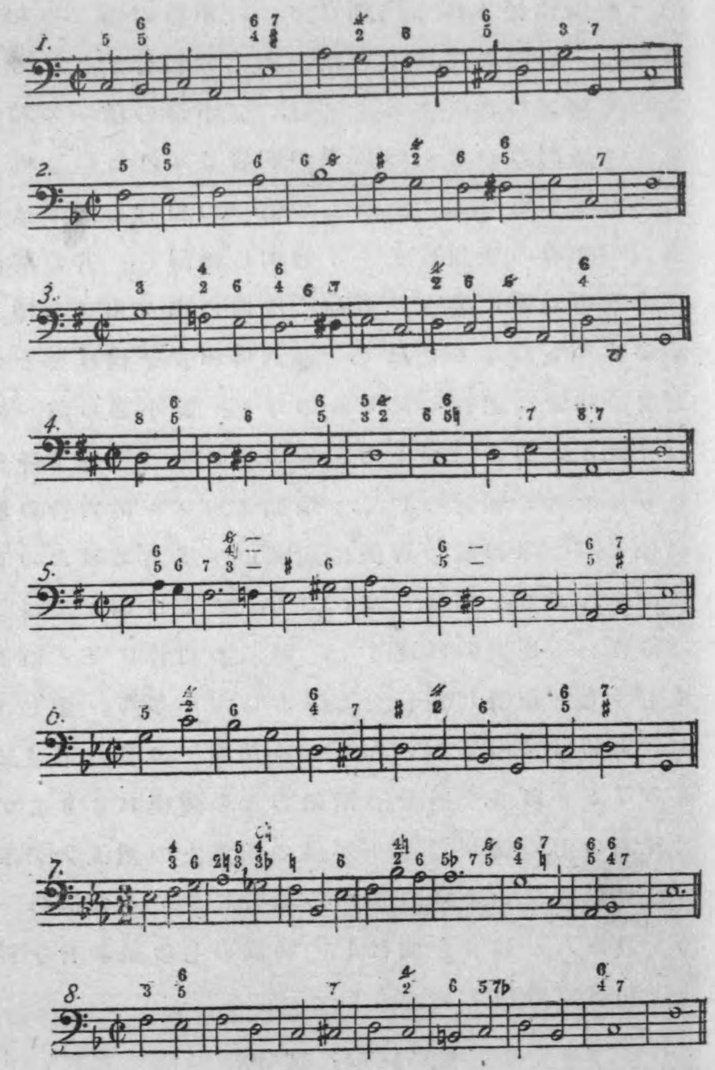
一小節の和音はハ長調の一度上の和音たると同時にト長調の四度上の和音に當るものなるを以て，二小節の第一の和音に於てハ長調と同族的關係を有するト長調に轉じその七の屬和音を現出したるものなり。三小節の第二の和音より四小節の第一の和音にわたりては減七の和音を使用してニ短調に轉調し，四小節の第二の和音に至りてハ長調に復歸し，五小節の第二の和音にては增六の和音を使用してイ短調の四度となり，六小節に至りて完全にイ短調に轉じたるを明にし，その以下は原調たるハ長調に復歸し終結を告げたるものなり。

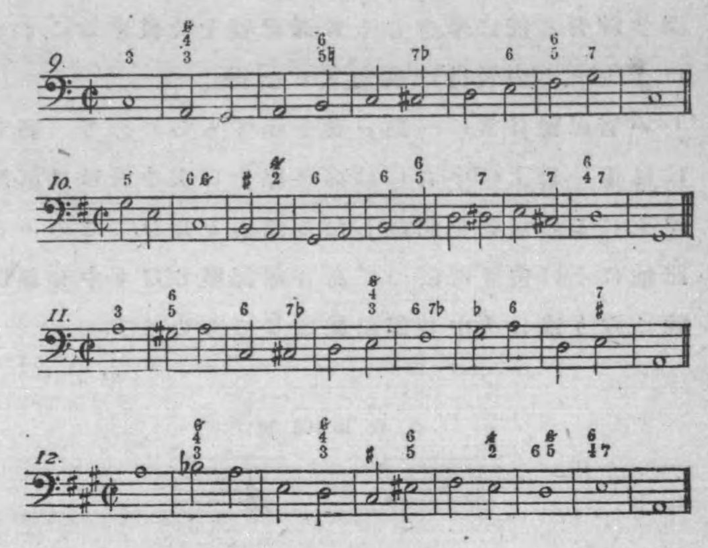
第二十七例題



ニ短調に始まれる例題なり。一小節の第二の和音は單にニ短調の二度上の增三四六の和音となれるのみにて轉調にあらざることは，二小節の第一の和音にてニ短調の一度上の四六の和音となれるによりこれを知るを得べし。三小節の第一の和音に於ては增五六の和音の使用によりイ短調に轉調し，其の解決は本章第五節に述べたる如く中間に或る和音の挿入を要するものなるを以て，四六の和音を挾みてその五度の和音に進行したるものなり。五小節の第一の和音はイ短調の二度上の和音の根音を一半音下降せしめたる六の和音にして，所謂ネーブル的六音の和音なり。この和音の解決は短調の一度上の四六の和音に進行するを普通とすれども，ここにありてはこの和音をヘ長調の四度とし，第二の和音にてその五度上の七の和音に進行せしめたるものなり。而して七の屬和音は增五六の和音と全然同一の響を有するものなるを以て，四分音階的の音の變換によりこのヘ長調の七の屬和音をホ短調の四度上の增五六の和音と見做し，六小節の第一の和音に於てホ短調の一度上の四六の和音を顯はし，同調の七の屬和音を經て主和音に解決したるものとす。

第十七課題





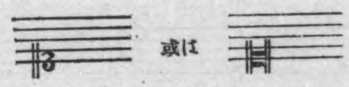
附　節　　總分譜記譜法

各五線譜表上に各聲音部を分離して記載するときは諸聲音各個の進行を一目瞭然たらしむるものにして，上來使用せしト音記號とヘ音記號とを有する二個の五線譜表を連結したる，所謂ピアノ用の譜表に比し遙に便あるものなりとす。而してこの諸聲音の分離配記には所謂古き音部記號即ちハ音記號を有する五線譜表三個と，ヘ音記號を有する五線譜表一個との四個の五線譜表の連合より成る總分譜を用ふべきものとす。音樂のすべての學習にはこの總分譜の使用に熟達することは缺くべからざる所なり。注意

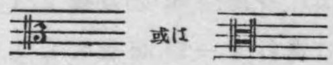
深き練習と既に學びたる音部記號を比較することとにより，この習得に成功するを得。

ハ音記號は常に一點ハ音を示すものにして，高音には第一線上に·中音には第三線上に·次中音には第四線上にこの記號を記載したる譜表を用ひ，このハ音記號はその位置に依つて高音部記號となり·中音部記號となり或は次中音部記號となるものとす。

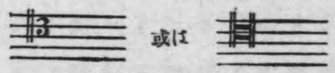
高音部記號



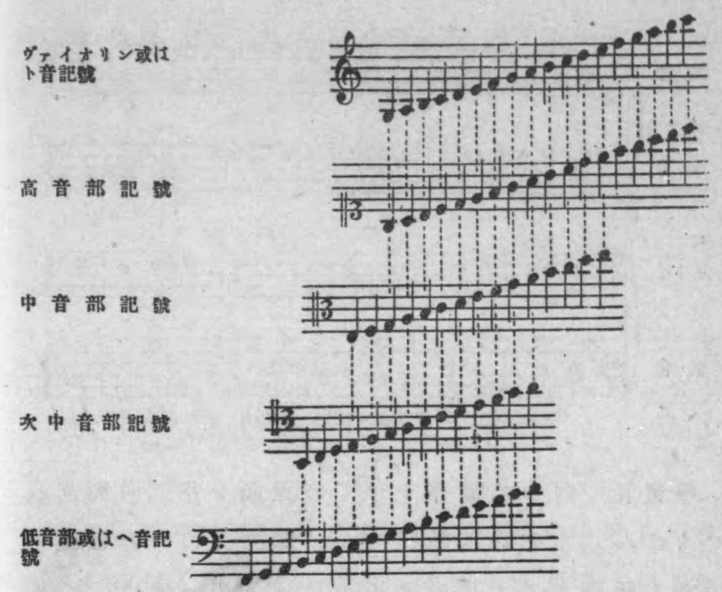
中音部記號



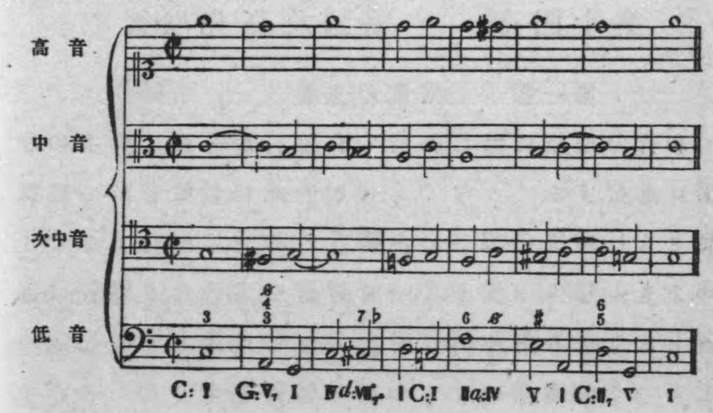
次中音部記號

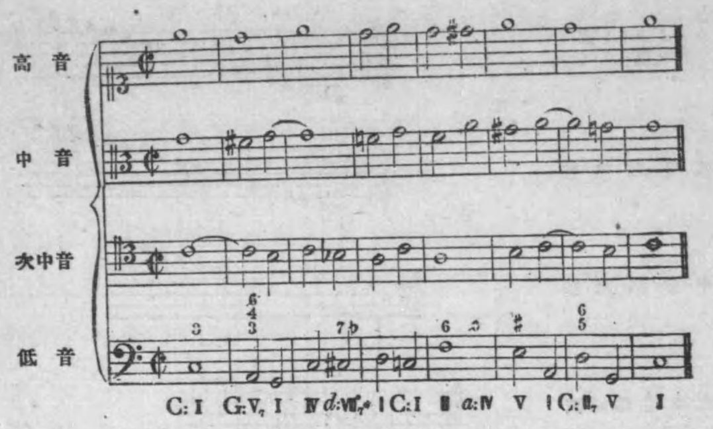


ハ音記號による譜表上の音列を示し，且つ各譜表の音を比較對照せんがために次に音列の一覽を掲ぐべし。



今試に第二十六例題を總分譜上に記載するときは次の如くなるべし。





學習者に向つて爾今すべての課題を各二回宛記載せられんことを切に勸奬せん。即ちその一回は從來の如く所謂ピアノ用の譜表上に，その一回はここに示したる總分譜上に記載することこれなり。

第十四章　繫留及び先取·後取

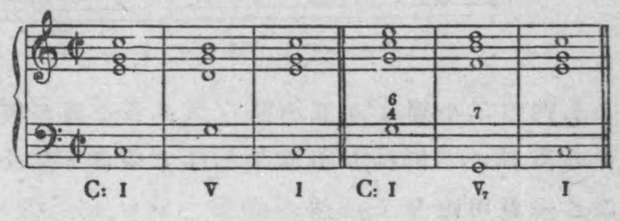
第一節　繫留の意義

和音の連結に際し和音の全聲音が一齊に隣次の和音に進行することなく，一聲音或は數聲音が一時保留せられ殘餘の聲音のみ隣次の和音に進行することあるものなり。而して一時保留せられたる聲音は遲延したる後ち追加的に隣次の和音に進入するものにして，この遲滯により和聲に繫留を生ずるものとす。

繫留の特性は顯はれたる和聲に逆つて不協和を形成し，興味ある變化を與ふるに存するものなり。

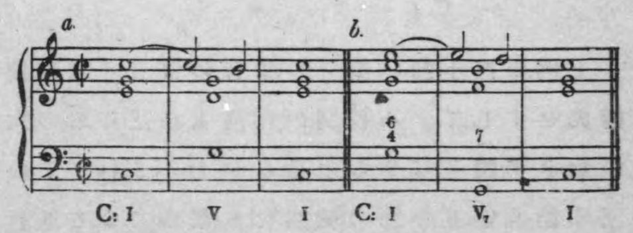
上來說述せし和音の連結法は，一の和音の全聲音が常に同時に次の和音に進行したるものなることは，次例に示すが如きものとす。

262.



然るに下例の如く次の和音に移りてもaは尙高音のハを留保し，bはなほ高音のホを存續し，然る後ち追加的にハをロに·ホをニに進行せしむることを得るものなり。

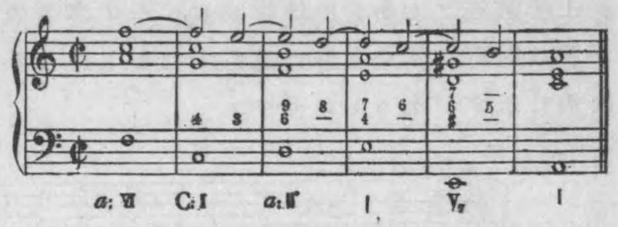
263.



繫留の本來の實體は，上來學習せし不協和音の形體によらざる一の不協和を，遲滯を行ひて生せしむることにより形成せらるるものなり。されど時とし

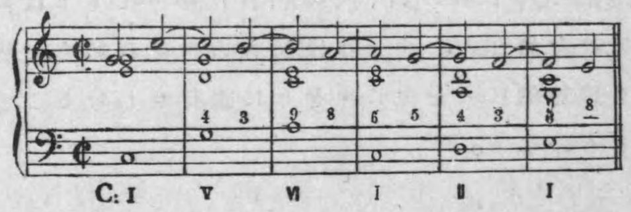
ては不協和を生ずることなくして繫留の性質を有するに至ることあるものとす。

264.



上例の二小節より五小節に至る各小節の第一の和音の高音は，何れも不協和を生じ繫留を構成したること一見明瞭なり。然るに

265.



上例の四小節の第一の和音の高音イは不協和音を構成せずして，ハ長調の六度上の三和音の六の和音の如き形體をなせるを見るべし。されどこの和音は三小節及び五小節の純然たる繫留による進行をなせる中間の位置にあるものにして，繫留の性質をとれる進行をなし，犯し難き繫留の結果を顯出したること明なり。

第二節　繫留の構成

繫留は次に擧ぐる三要件の圓滿なる遂行によつて構成せらる。三要件とは

1. 豫　備
2. 繫　留
3. 解　決

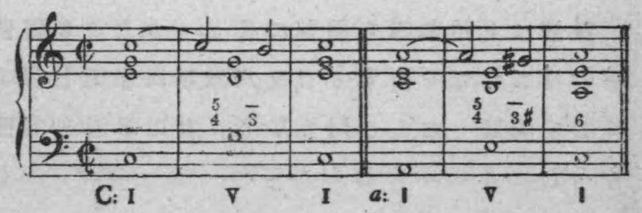
即ちこれなり。

A. 豫備

豫備とは繫留せしむべき音を前和音に於て豫め顯出せしむるをいふ。豫備は普通三和音中の或る音によつて起り得るものなれども，七の和音の各音も亦豫備として使用せらるるものなり。七の和音中七の屬和音の第七音は最もより良く豫備に適し，減第七音は最も少なく利用せられ得。而して普通に短第七音は長第七音よりも，より良く繫留の豫備に適するものとせらる。

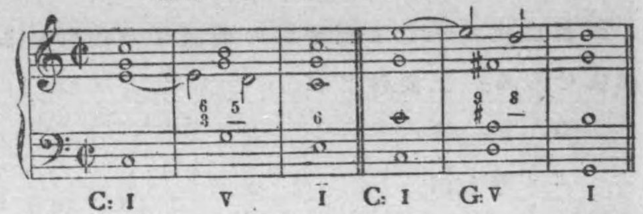
根音の一八音に依る豫備

266.



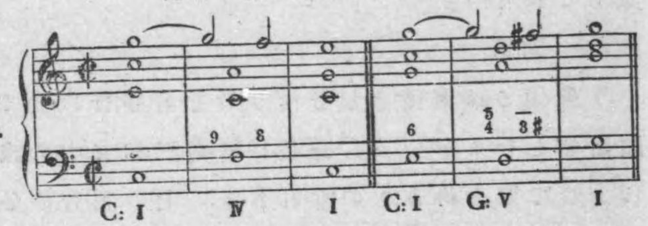
根音の第三音に依る豫備

267.



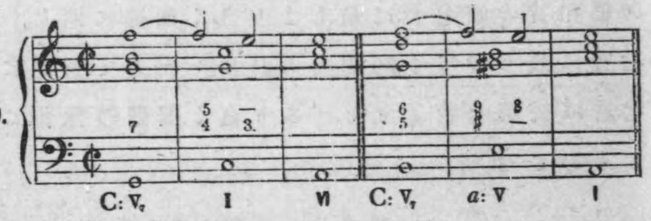
根音の第五音に依る豫備

268.



七の屬和音の第七音に依る豫備

269.

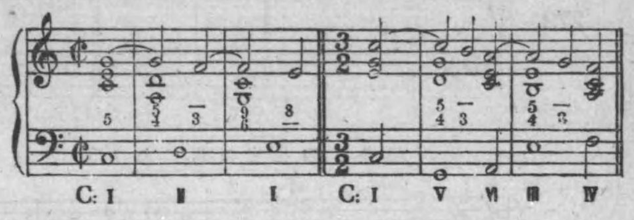


豫備は上拍部即ち弱部に存し，少くとも繫留と同一の長さたるを要するは第八章第四節第七音の豫備に於て說述したると同樣なり。其の章節を參照せらるべし。

B. 繫留

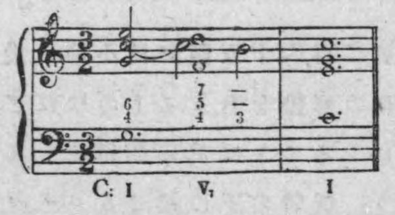
繫留とは和聲に逆つて不協和を形成するをいふ。繫留は拍子の種類の如何に關はらず，多く小節の第一拍即ち强部に現出すべきものとす。

270.



注意　三拍子の場合には時として下例の如く第一拍上に來らずして，第二拍上に顯はるることあるものなり。

271.



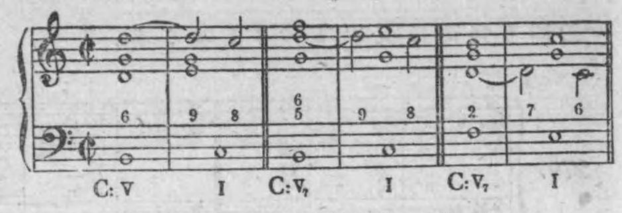
繫留は小節の弱部即ち第二拍或は第三拍上に下向して解決するを要するものなることは，第二百七十例に示したるが如きものとす。但し或る僅かなる場合に於て上方に解決せらるることあるものなるは更に後に解明すべし。

繫留は三和音の第三音の前に或は第八音即ち根音の一八音の前に現出し得るものなれども，三和音の

第五音の前には眞の繫留を構成し能はざるものとす。

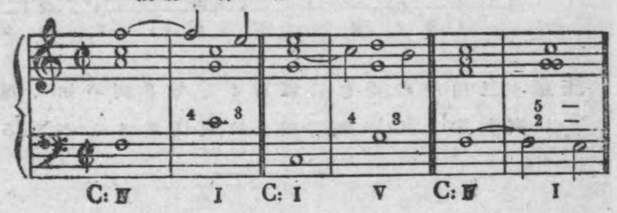
根音の一八音の前にある繫留

272.



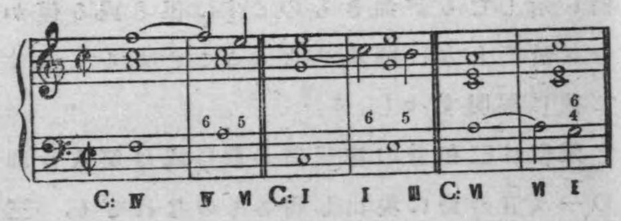
根音の第三音の前にある繫留

273.



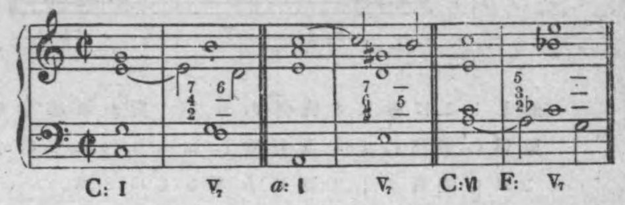
下例は第二百六十五圖の四小節に於けるが如く，兎に角繫留の形體を有するものなれども，其の排置幷に進行によるときは眞の繫留として認むるを得ざるものなり。低音の下に記せるローマ數字の示せるが如く，すべて完全なる和音としてあらはれ，眞の繫留の不協和を缺乏せるを見るべし。

274.



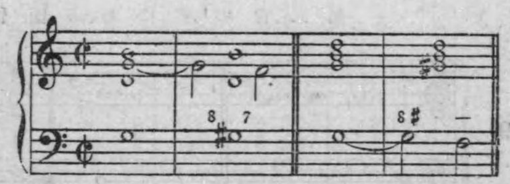
然し七の和音の第五音の前には三和音の根音の一・八音と第三音との場合に於けるが如く，繫留を構成し得るものなり。

275.



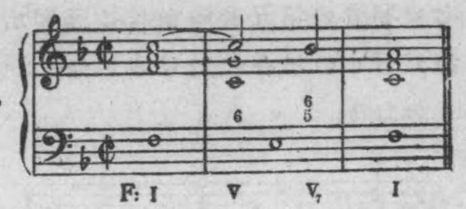
七の和音の第七音を遲滯して繫留せしむるを得べき音は，根音の第八音にして不協和音にあらざるが故に，通例之を繫留すること能はざるものとす。されど或る單一なる場合に於てのみ繫留を構成し得るものにして，第七音の前に一の減八度若くは增八度を現出せしときこれなり。

276.



注意 完全八度の前出するときは繫留を構成すること能はざるものにして，下例の低音の下に記載せられたる數字の如く完全なる三和音幷に七の和音となるものなるを見るべし。

277.

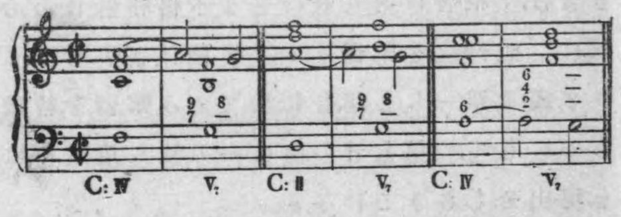


然しここに稀なる例外ありて，斯かる和音の結合が繋留の形體による進行中に加へられたる場合には，これを繋留として認めらるるものとす。

七の和音の各音の前にある繋留の一班を擧ぐべし。

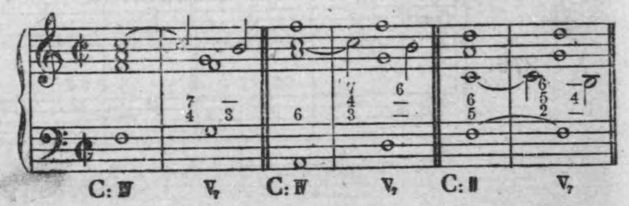
根音の一八音の前にある繋留

278.



第三音の前にある繋留

279.

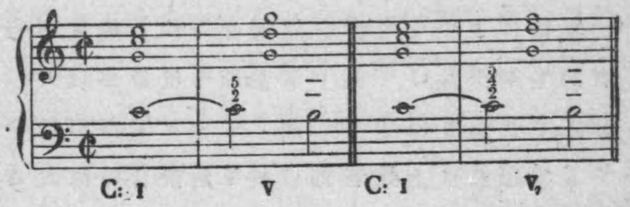


注意　七の和音の第五音の前にある繋留は第二百七十五例につき，第七音の前にある繋留は第二百七十六例につきその一班を見るべし。

低音に於ける繋留は多くは一の三和音の第三音の前に生じ，其の解決は常に六の和音或は五六の和音に進むものなれども，稀には七の和音の第五音の前に起りて常に三四六の和音に解決することあるものなり。尙甚だ稀には三和音或は七の和音の根音の前に存することあるものとす。

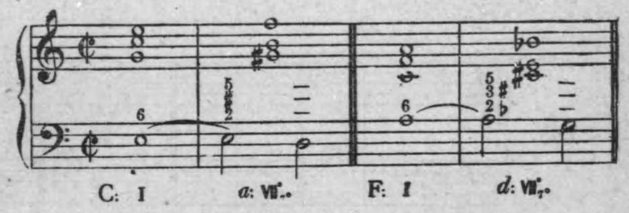
三和音及び七の和音の第三音の前にある低音の繋留

280.



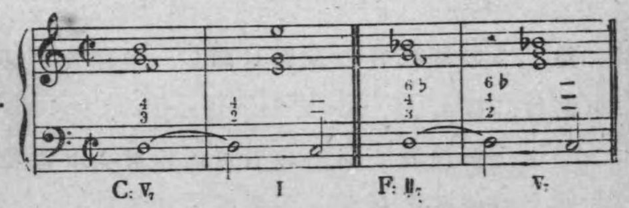
七の和音の第五音の前にある低音の繋留

281.



三和音及び七の和音の根音の前にある低音の繋留

282.



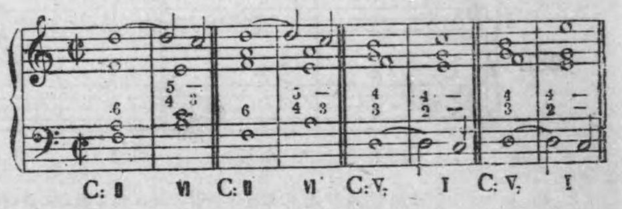
注意 第二百八十二圖に於て，三和音の場合には三和音の前にホを根音とし第五音を缺如せる不完全なる二の和音を構成し，七の和音の場合には二の和音はすべての音を具備し繫留と二の和音との兩意を有する曖昧の和音となれるに注意すべし。

C. 解決

繫留によつて生せしめたる不協和の音を順次的に下行せしめて協和音を形成するを解決といふ。

繫留によつて進行を遲滯せられし後ち下行すべき音即ち解決音は，最下音部即ち低音部以外に存するを許さざるものなり。而してまた繫留が低音部に存する場合には上聲音部に於て解決音の保たるるを許さざるものとす。

283.



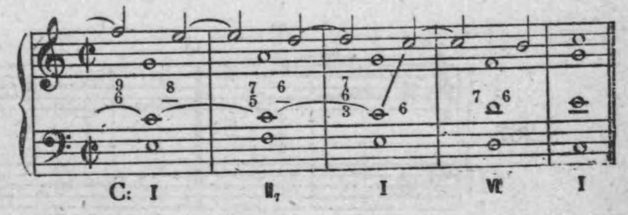
然しこの解決音の重複に關し一の除外例あり。反復進行に際し

1. 解決音と同一の音が遙に前より繼續して一の中聲に存し

2. 解決音に等しき音が繫留と遙か離れて存するとき

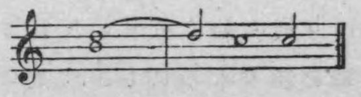
この解決音が主和音の根音なる場合には解決音の重複を許容せらるるものなるのみならず，特に聲音處理の關係上重複を必要とするものなることこれなり。而してこの解決音が屬和音の根音なる場合に重複せらるることあるべく，稀に下屬和音の根音なる場合に重複せらるることあるものとす。下例は解決音が主和音の根音なる場合に於ける一例にして，第三小節の進行は佳良なる結果を有するものなり。

284.



注意 下例の如く同音に於ける根音の重複を以て誤れる進行なりとす。常に少くとも一八音の距離を保たしむるを要す。

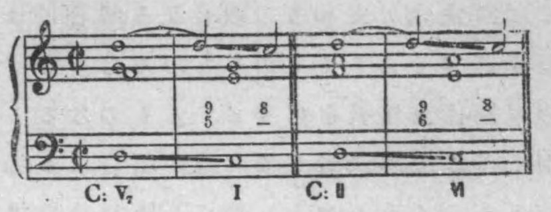
285.



繫留せられたる音が解決音に進行する場合に於て

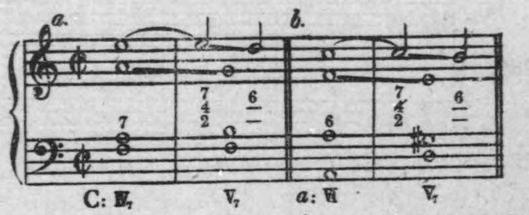
生ずる並行八度は，隱伏八度と同樣に誤れる進行として認められ，禁ずべきものとせらる。

286.



眞の不協和の繫留の遲滯によつて起る並行五度が何れの聲音部の間に生ずるも，他の聲音部の進行にして正當なる場合には，之を採用して可なるものとす。

287.



上例は隣接したる二聲音部の間に生じたる並行五度なbと雖も，其の結果佳良にして第一流の著作家の手に成れる四聲の樂曲に於てこれを見る所のものとす。殊にb例の如く低音の反行せる場合には一層優良の結果を齎すものにして，其の理由は

1. 一は一の聲音の遲滯せると

2. 一は繫留の性質を有する和音の結合なると

3. 加ふるに他の聲音の反行せると

により，並行五度の不快なる結果を十分に除去せらるるを以てなり。

上來既に示したるが如く，繫留は低音に對して位置する音程を，低音上に記載したる數字によりて表示せらるるものとす。二行に記したる左方の數字は即ち繫留音の位置を示し，右方の數字はその解決音の位置を示すものなり。

今ここに其の意義の一班を解說すべし。

98 は根音の第八度の前に存する第九度の繫留。(a)

43 は三和音の第三度の前に存する第四度の繫留。(b)

8 5 43 は上の繫留を完全に示したる記法。

7 43 は七の和音の第三度の前に存する第四度の繫留。(c)

7 5 43 は上の繫留の完全なる記法。

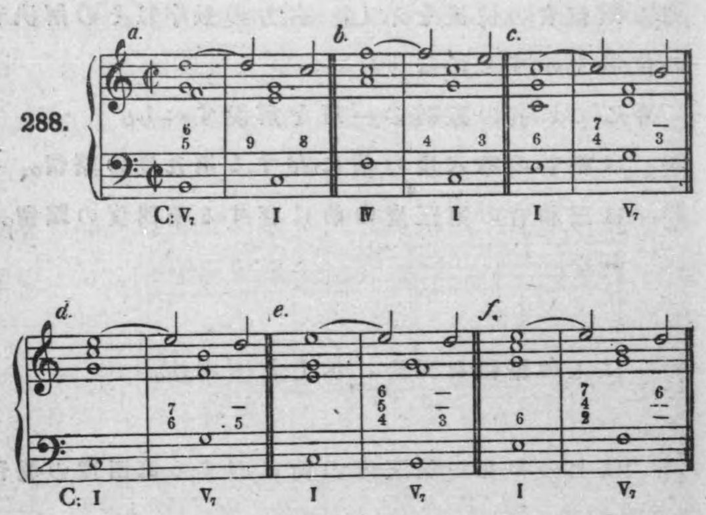
7 65 は七の和音の基本の位置に於ける第五度の前に存する第六度の繫留。(d)

$\begin{matrix}7-\\65\\3-\end{matrix}$ は上の繫留の完全なる記法。

$\begin{matrix}6-\\5-\\43\end{matrix}$ は五六の和音の低音の第三度の前に存する第四度の繫留。(e)

$\begin{matrix}76\\4-\\2-\end{matrix}$ は二の和音の低音の第六度の前に存する第七度の繫留。(f)

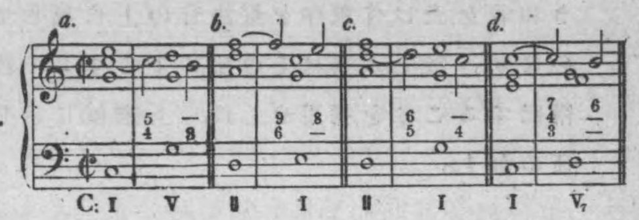
288.



繫留を示せる數字の上或は下に附記せられたる數字は和音の位置を指示するものにして，例へば $\begin{matrix}5-\\43\end{matrix}$ は基本の位置の三和音(a)，$\begin{matrix}98\\6-\end{matrix}$ は六の和音(b)，$\begin{matrix}76\\4-\end{matrix}$ 及び $\begin{matrix}6-\\54\end{matrix}$ は四六の和音(c)，$\begin{matrix}76\\4-\\3-\end{matrix}$ は三四六の位置(d)なるが如きこ

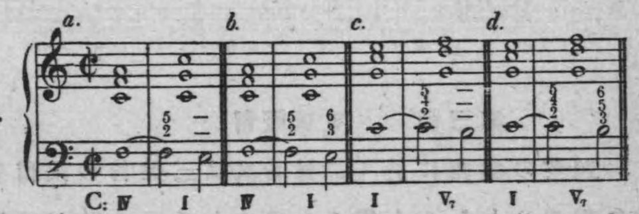
れなり。

289.



繫留の低音に存する場合には，繫留音に對し上聲に於て表はれたる音の音度を，繫留せられたる音符の上に記載して表示するものとす。例へば $\begin{matrix}5-\\2-\end{matrix}$ 或は $\begin{matrix}5-\\4-\\2-\end{matrix}$ は横線の示すが如く繫留音上のその數字に該當する音を持續することを意味し，$\begin{matrix}56\\23\end{matrix}$ 或は $\begin{matrix}56\\45\\23\end{matrix}$ は低音に於ける繫留音幷に解決音に對して其の數字に該當する位置に上聲の存することを表示するものにして，結局同一の意味を有するものとす。下圖のaとbと相等しく，cとdと同一にして何等の差異なきが如きものなり。

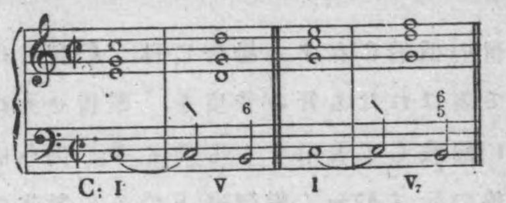
290.



附言　以前には低音に於ける繫留を示すに一の斜

線を繫留音の上に置き，解決によつて決定すべき和音を表はす數字を解決音の上に記したるものなり。然し本書はその法によらずして數字を附記することを採用せしは，上來既に示したる所の如し。

291.



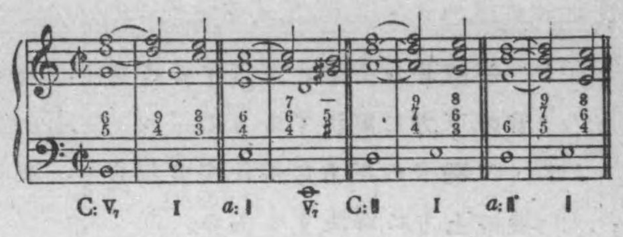
若し解決の和音中に半音階的の變化ある音を含む場合には，例へば $\frac{5}{2}$，$\frac{56}{45}$ の代りに $\frac{56}{23}$，$\frac{55}{46}$ 等の記法を用ふるものとす。

292.

第三節　重複繫留

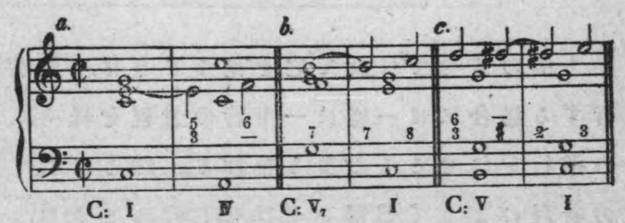
四聲の樂曲に於て二聲音又は三聲音の繫留を同時に現出せしむるを得るものにして，これを總稱して重複繫留とす。

293.



上來述べし如く繫留は一聲音なると多聲音なるとを問はず，その解決はすべて下方に進行するを以て自然的なりとするものなれども，或る場合に於ては上方に解決することあるものにして，繫留が解決音に向つて一半音の上行することは常に行はれ(a)，就中繫留が導音の性質を帶びたる場合(b)，或は又上行して解決すべき自然的の性質を有する半音階的の變化音なる場合(c)に，特に起り得るものとす。

294.



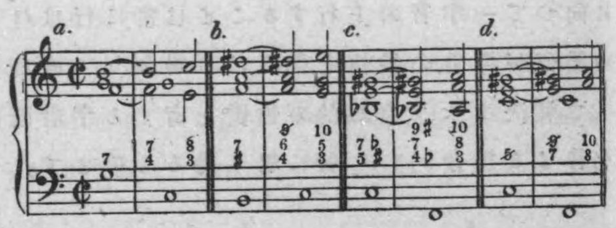
注意　上方へ解決すべき繫留音に對し遲意音なる特名を附して，これを下方へ解決すべき繫留音と區別するものあり。

重複繫留の解決には下に擧ぐるが如き種種の形あ

り。

1. 一聲音の上方に進行するに對し，他の一聲音の下方に解決するもの。(a)
2. 二聲音の下方に解決する場合に，他の一聲音の上方に解決するもの。(b)
3. 前項に反し二聲音の上方に進行するに對し，他の一聲音の下方に解決するもの。(c)
4. 上に等しく二聲音の上行する場合に，他の一聲音の同度に保續せらるるもの。(d)

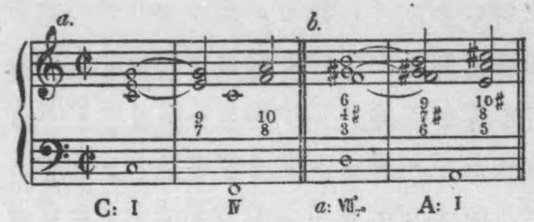
295.



上例のすべてに就て之を見るときは，繫留音の上行する場合には一樣に一半音の音程を保ち，自然的の進行をなせるものなるを知る。然るに若し一全音の音程によりて繫留を上行せしむるときは，剛直に響き不自然的の結果を生ずるものにして，純正なる樂曲にては決して單獨に斯る進行を採らしめざるものとす。されど一の繫留が一全音程の上行をなす場合に，一の他の繫留をして一半音程の上行を併せ行

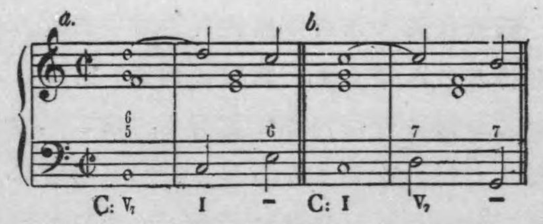
はしむるときは，之がために和らげられ佳良の進行たるに至るものなり。下圖aは即ち其の一例にして，bは之に加ふるに一の繫留を下方に解決せしめたる一例なり，ともに佳良のものとせらる。

296.



上來說きし所はすべて繫留せられざる諸聲音をして，繫留せられし音の解決の終結まで常に同一の音度に持續せしめ，繫留と解決とをして唯單一なる和音を形成せしむるに止まれるものなり。然し低音を繫留の解決に際し同時に解決和音中の一の他の音に進行せしむるを得るものなるは，下例に示すが如きものとす。

297.

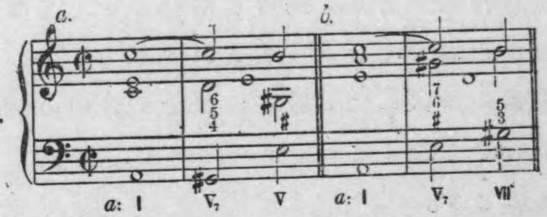


aは繫留の解決に際し低音は根音の第三音に進み

て六の和音を構成し，bは三四の和音より基本の位置に於ける七の屬和音に進みたるものにして，根音たるトは繫留の解決に際し後打—本章第四節參照—の形によつて表はれたるものなり。

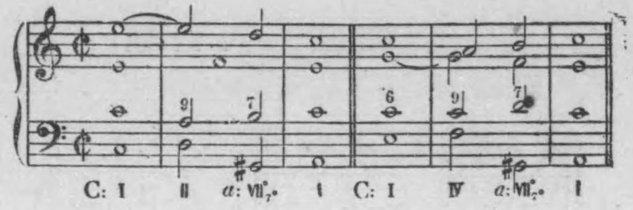
上例にありては低音が或る他の音に進行せる際，中聲は依然として其の位置を持續せるものなれども，低音の進行と同時に中聲をしてその位置を拋棄して，或る他の音に進ましむるを要することあるものなり。下例aの次中音は第三音の缺を補はんがためにニより嬰トに下行し，bの中音は導音の重複を避けんがために嬰トよりロに上行せるが如きこれなり。

298.



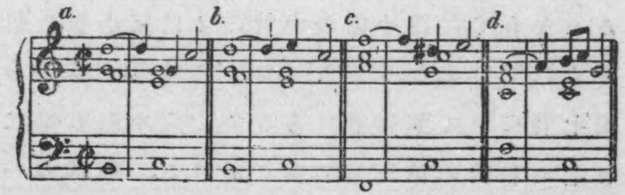
低音は獨り繫留の解決和音中の或る音に進行するを得るのみならず，繫留の解決と同時に本來の解決和音の他の音に向つて進行し，或る一の他の和音に屬せしむるを得るものなり。この場合に中聲の一或は二個の音は，自然に新和音の音に進行するの餘義なきに至るものとす。

299.



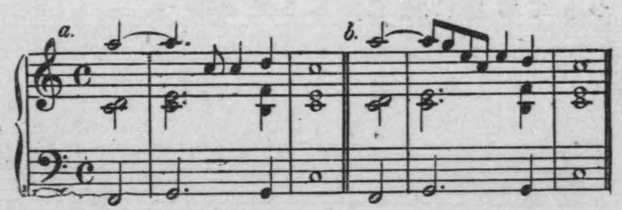
繫留と解決との中間に一個或はより以上の他の音を挿入することを得るものにして，その中間音は解決和音中に含まるる或る音たるを得べく，或は解決和音中に屬せざる或る他の音たるを得べし。

300.



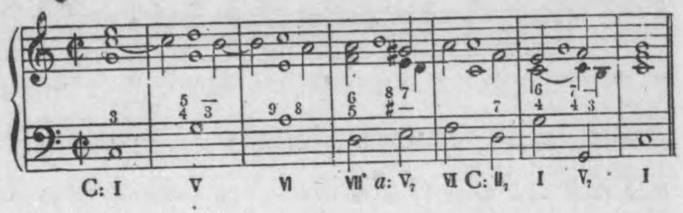
繫留に於ける本來の解決音を時として全く省略することを得るものなり。

301.



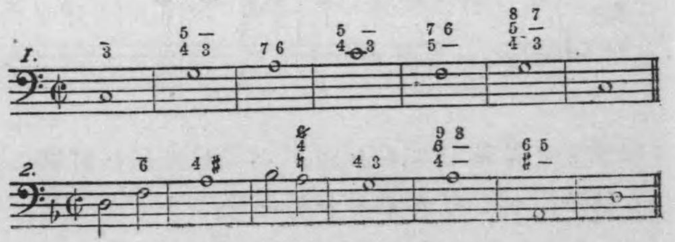
解決音を省略したる上例aは，上例bを簡單にしたる結果なりと考察するを得べし。

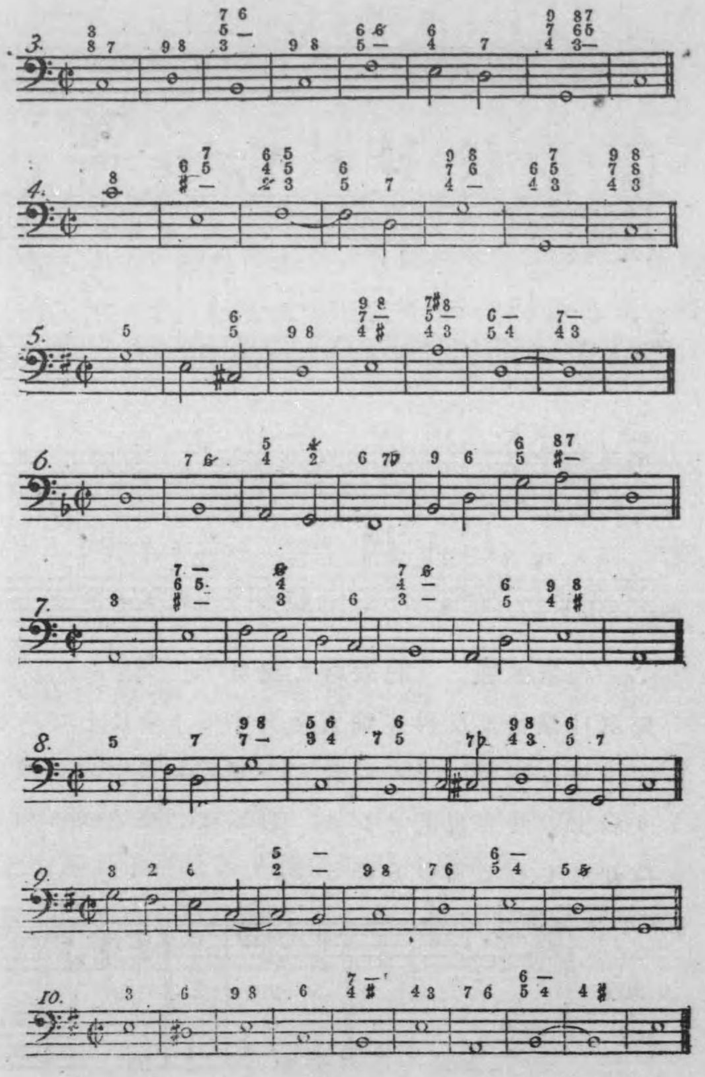
第二十八例題

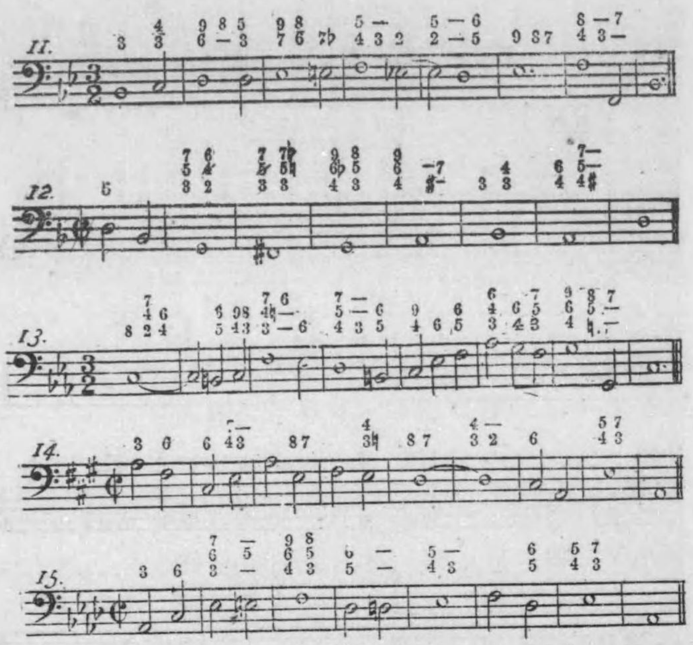


二小節の中音のハは根音の第三音の前に於ける繫留にして，その豫備として一小節に根音の一八音たるハを有す。四小節の中音のイは三小節に於て豫備せられ繫留の如き形をなせりと雖も，五六の和音の第七音にして繫留音にあらず。六小節の第二の和音は七の和音の第三音の前に於ける，繫留の一例を示したるものなり。本例題はすべて單一の聲音の繫留のみ，重複繫留はここに之を擧げざれども，課題につきて容易に練習することを得べし。

第十八課題



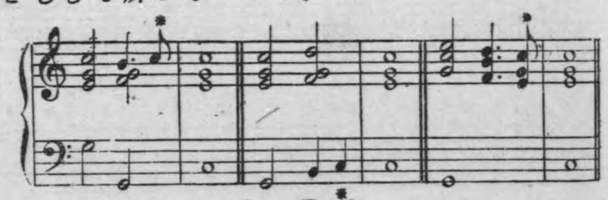




第四節　先取幷に後打

先取は繫留と反對の性質を有するものにして，次に來るべき和音の現出に先だち其の和音中の一或はより以上の音を現出せしめ，以て次に來るべき和音を豫知せしむる所のものとす。

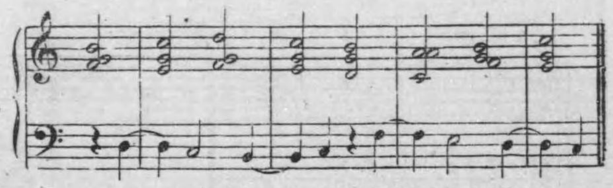
302.



先取によつて生ずる不協和は鋭く且つ不明瞭なるものなるを以て，先取は多く短かき拍子上に表はれ，長歴時の音又は緩徐なる進行をなす場合には，稀に使用せらるるか或は全く使用せられざるものとす。

先取と反對にして繫留に類似せる性質を有する音に後打あり，後打は多くの連續的系列をなして顯はるるを常とす。いま低音にあらはれたる後打の一例を示すべし。

303.



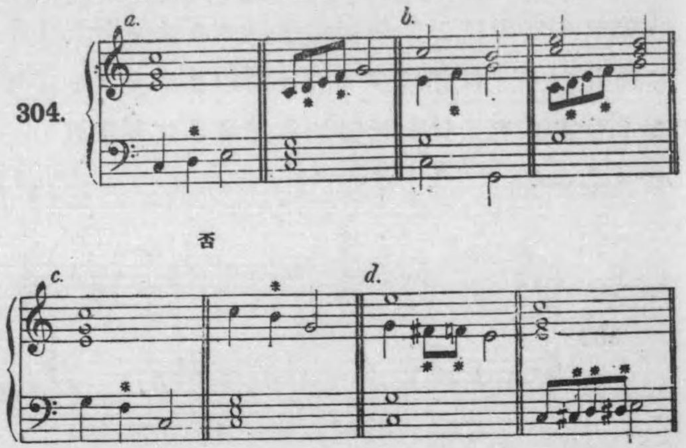
第十五章　和音に屬せざる諸聲音

旋律的の修飾を施さんがために和音中に含存せざる不協和の音を現出せしむることあるものにして，之を經過音・經過和音・轉過音幷に補助音といひ，他の聲音部の音に顧慮することなく或る他の聲音部の音を保留することあるものにして，之を低續音幷に保續音といふ。

第一節　經過音及び經過和音

一つ或は二つの和音中の二音間に順次的に挿入せられたる音にして，和音の響きたる後ち部分的の拍子上に現出する音を經過音といふ。經過音は拍子の第一拍即ち强部には決して現存せざるものなり。

304.

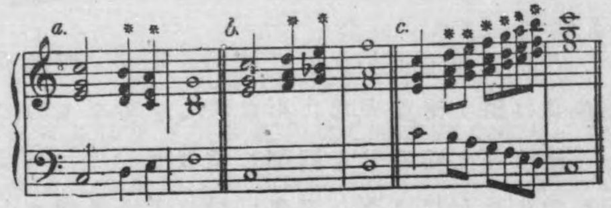


上圖a•b及びdの＊を附したる音は經過音にして諸聲音部に形成し得るものなるを見るべし。而してa及びbは全音階的に挿入せられたるものにして之を全音階的經過音といひ，dは半音階的に挿入せられたるものにして之を半音階的經過音といふ。cの兩例ともに經過音として許容せられざるは前者はヘ音よりハ音に跳越し，後者はロ音よりト音に跳越したるによる。但しdの如き半音階的經過音にありては，たとひ其の音階中に含まれざる音を存するとも，

素より可なるものとす。ただ茲に一の注意すべきことあるは，純正なる樂曲に於て夥多なる半音階的經過音を使用せられざることこれなり。

經過音は一聲音部のみに限らずして，二聲音部若くはより以上の聲音部に現出せしむるを得るものなり。かく多數の聲音部にあらはるるときはここに經過和音を形成す。

305.



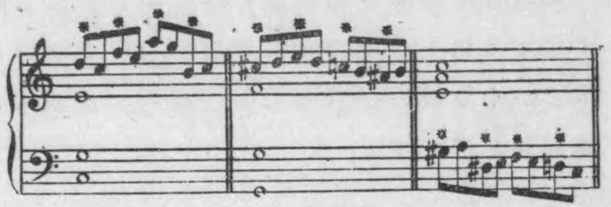
上圖のaに於ける經過音はハ長調の導音上の六の和音と同調の六度上の四六の和音の形をなし，bに於てはハ長調の二度上の二の和音とハ長調に近き關係を有するヘ長調の五度上の七の和音の形をなし，cに於ける各和音も亦それぞれ或る音度上の和音を形成するものなれども，何れもみな之を經過和音として取扱ふべきものとす。

第二節　轉過音及び補助音

轉過音は和音の響くと同時に豫備を有せざる繫留の如き性質を以て現出したる和音外の音にして，全

音若くは半音の順次的進行により和音中の音に進むものをいふ。之を以て轉過音は常に小節の强部に順次的若くは跳越的に現出するものとす。

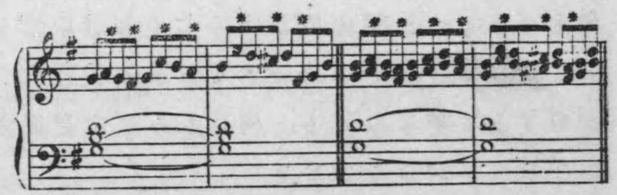
306.



＊によつて示したるは轉過音なり。轉過音も亦經過音の如く諸聲音部に形成するを得るものとす。

補助音は轉過音を弱部に位置せしめたるに等しきものなるを以て之を弱部に於ける轉過音として論せらるることあるものなり。和音に含まれたる音より發して和音外の音に至り，復び和音中の音に歸る裝飾的の音をいふ。

307.

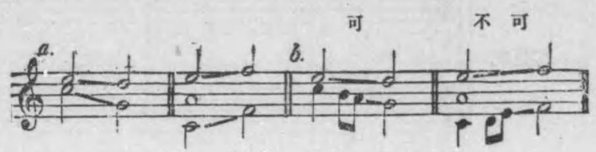


第三節　經過音及び補助音に依る不良進行

經過音の挿入によつて隱伏五度若くは隱伏八度を

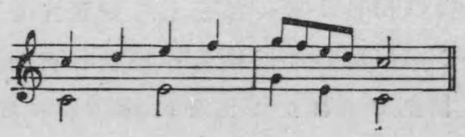
顯はれたる並行五度若くは並行八度たらしむる場合には，並行五度は許容せらるれども並行八度は許容せられざるものとす。

308.



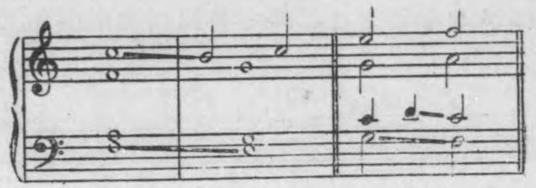
上例aに於ける隱伏五度幷に隱伏八度のともに許容せらるるものなることは既に述べし所なり。然るにbの如く其の間に經過音を挿入するときはここに顯はれたる並行五度及び並行八度の進行となり，並行五度は誤れる進行ならずとせらるれども，並行八度は許容せられざる不良の進行なりとせらるべきものとす。之に反し下例は經過音のために隱伏八度となれるものにして，經過音を除くときは顯はれたる並行八度の進行をなし，普通に誤謬なりとせらるべきものなり。されどこれは和聲的の音を强勢ならしめん目的のために，特に一八音を重複したる所謂重複八音と稱せらるるものにして，器樂曲に屢使用せらるるものとす。

309.



補助音のために生じたる並行五度の進行も，亦誤りとして禁せらるべきものなり。

310.



第四節　低續音及び保續音

樂曲の韻節的·等時的に區劃せられたる部分に於て，上部の諸聲音が低音に屬せざる和音を交錯して現出せるに係はらず，低音が同一の音度に持續せらるるときはこの低音を稱して低續音といふ。低續音は樂曲の首部に於ては主音たるべく中部及び終部に於ては主音若くは屬音たるべく，或は主音屬音を併せ現出せしむるを得るものなり。低續音に對し上部の諸聲音は各自互に和聲的連結の方則に從つて和音を構成し得るものなれども，然かも低續音に屬せざる和音を多數續出せしめて，低續音との聯絡を失ふことを許さざるものなり。低音に屬せざる和音は强部若くは弱部に任意位置するを得るものなれども，低續音の最後の和音は常に注意して處理することを要するものとす。而して低續音の終結は樂曲の韻節的·等時的に區劃せられたる部分に行はるるものにして，

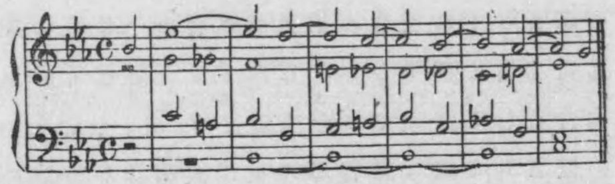
任意に中絶することを許さざるものなり。

主音の低續音

311.

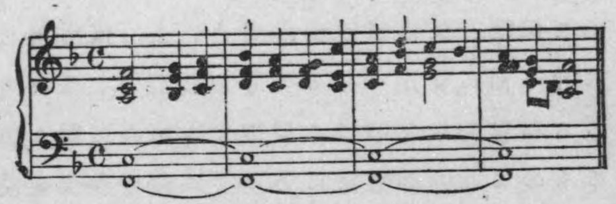
屬音の低續音

312.



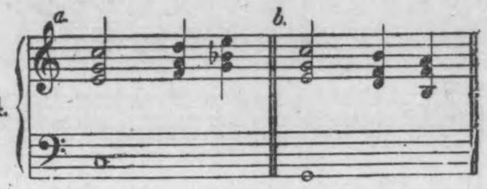
主音と屬音との低續音

313.



低續音に接近したる聲音部即ち四聲の樂曲に於ける次中音は，上聲に對し獨立したる低音となりて和聲的の處理を掌るものなり。故に低續音が偶然和音中に屬することあるも，上聲音は低續音によつて處理せらるることなく，實際は低續音に近き聲音部によつて處理せらるるものとす。

314.

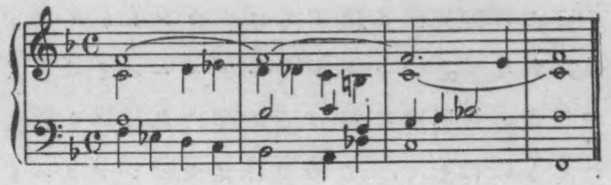


a例の中音の變ロ音は低音ハの第七音に當るものなれども，低音以外の諸聲音の處理法に從ひ，b例の高音のイは低音の第九音に當り，多くの理論家は九の和音と稱するものなれども，實は導音上の七の和音として處理すべきものとす。

低音外の或る聲音部に於て低續音の方法により或る音を同一の音度に持續せられたるときは，之を稱して保續音又は轉回低續音といふ。保續音は低續音に比し稀に使用せらるるものにして，保續音に屬せざる和音の最も尠なく現出する場合に限り用ひらるるものなり。器樂曲にありては保續音は比較的強き作用をなし，數小節にわたりて稍長く現出するものなれども，合唱曲にありては餘り長く續出することなく，且つ稀に使用せらるるものとす。保續音に適する音は，低續音の如く主音或は屬音なり。

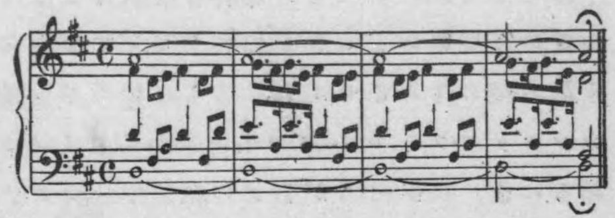
注意　主音及び屬音以外の聲音を以て低續音并に保續音となすことありと雖も，自然的の方法にあらず。

315.



低續音と保續音とを併せ使用することを得るものにして，下例は低續音に主音を存し，保續音に屬音を存するものの一例なり。

316.



第十六章　定旋律の調和

上來說述せし所は基礎低音上に和音を構成し，これを互に連合せしむべき一般の方法に屬し，低音の構成については未だ全く論及する所あらざりしなり。本章に於ては單純なる旋律的進行をなせる一聲音部，即ち定旋律に和聲的伴音を附加連結することに關し解く所あらんとす。

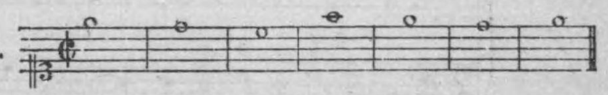
第一節　定旋律の意義及びこれに附する伴音

ここに定旋律と稱するは，カントゥス・フィルムスの譯名なり。カントゥス・フィルムスとは古くローマの祭式の合唱歌に於ける旋律に名づけられしに始まれるものにして，この旋律は大グレゴリーによつて選輯せられ，年と共に其の數を增し其の序次を整ひ，ついに聖歌即ちアンティフォン中に加へらるるに至れるものなり。而してこの聖歌は當時非常なる尊敬を以てせられ，すべての教會合唱歌に對する唯一の法理たり規範たるべきものにして，其の中の旋律は永久不變のものとせられ，ここに始めて定旋律即ちカントゥス・フィルムスの名を與へられしものとす。然るに後には作曲者が自己の樂曲中にこのグレゴリーのカントゥス・フィルムスを採擇してそれに對聲を附したりしが，更にこの目的に向つて本來のカントゥス・フィルムスに非らざる他の旋律をも使用し，對聲を附する基礎となるべき與へられたる旋律に對し，從來慣用せしカントゥス・フィルムスの名稱を轉用するに至れるものなり。故に現今にありては定旋律即ちカントゥス・フィルムスとは對聲の基礎たるべき旋律，約言すれは一の課題とも稱すべき意に轉化したるものといふを得べし。

定旋律に他の聲音を伴はしむるに當つては，定旋

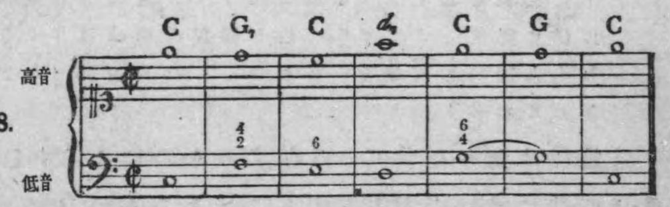
律に他の聲音を隨從せしむべきものなりと雖も，然かも諸聲音部をしてその本來の自由と獨立とを以てしたる進行を許認して，これを侵さざらんことを要するものとす。今高音に於ける簡單なる一の定旋律をとりて，これに伴音を附する一班を說示する所あらんとす。

317.



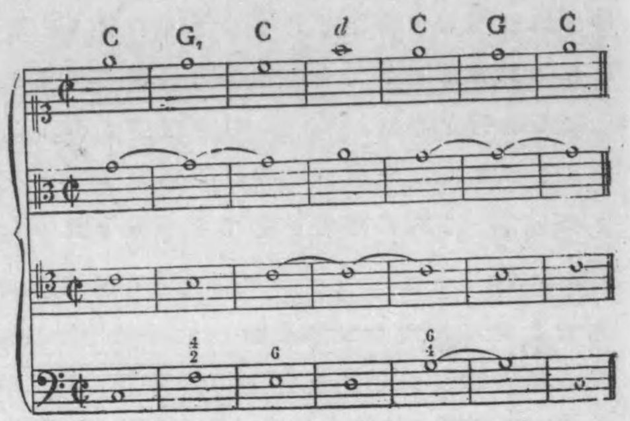
この定旋律に伴音を附せんには先づ和聲的基礎たるべき根音を決定し，その根音に基き十分の注意をなし，低音をして適切なる進行をなさしむべきものなり。

318.



この定旋律に對し種種の低音を以てすることを得べけれども，先づ一例として上の如き低音を選びたり。斯く低音を決定したる上はこれに中聲を附加するは頗る容易なることにして，まさに下例の如くなるべし。

319.



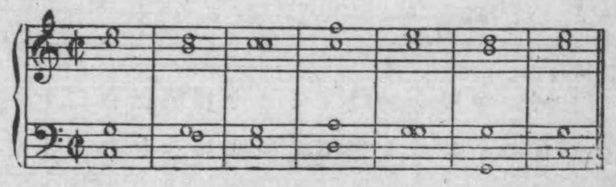
注意一　定旋律の上に記したるアルファベットは和音の根音を示したるものにして，其の大字は長和音・小字は短和音なり。

注意二　以下示す所の例題には，場所を省かんがためト音記號を記したる譜表を用ひて，諸聲音を其の中に併せ記すこととせり。然し練習の際にはすべて三百十九圖の如く總分ニを用ひ，これに習熟せんことをつとむべし。

定旋律は獨り高音にのみ存するものにあらずして，或は低音に或は中聲に存することあるものなり。若し定旋律の上聲即ち高音以外の聲音部に存したる場合には，上聲即ち高音の形成に關し十分の考慮をなし，高音をして旋律的進行をなすべき上聲の性質を全く失はざらしめず，中聲若くは低音に於けるが如き處理をとらざらんことに留意すべきものとす。そ

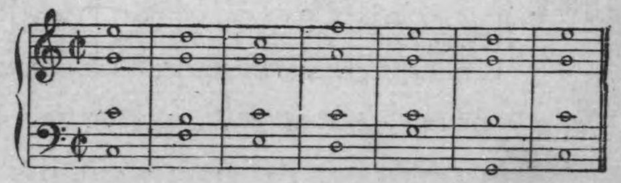
れがためには先づ高音を三小節を超えてより長く同度の音に保持せしむることなく，或は順次的の進行により或は容易に達し容易に歌ひ得らるべき音程の跳越により，能ふ限り旋律的の進行をとらしめ，且つ中聲即ち中音と高音・次中音と中音との距離を一八音以上にわたつて遠く隔たらしめざるを要す。

320.



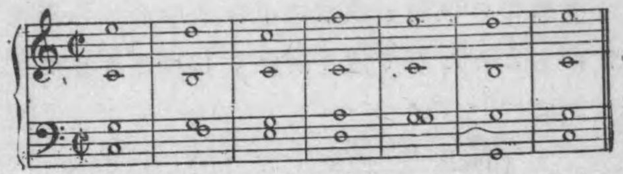
上例に於ては單一の各聲音が正當に進行し，和音の結合また自然にかなひ強要的にあらずと雖も，中聲の距離著しく遠きにすぐるを以て，良き結果を齎らさざるものとす。いま下例の如く中聲即ち中音と次中音との位置を轉換するときはここに初めてより良き響きを呈し，吾人に滿足の感を與ふるに至るものなり。

321.



中音と高音との距離一八音以上にわたるときは，各聲音の進行幷に和音相互の關係正しきを得たるにかかはらず，不良の結果を生ずるものなり。其の例下の如し。

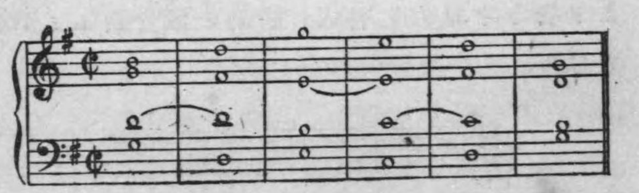
322.



上例の中聲を轉換するときは第三百二十一例に等しきものとなるを以て，既に述べし如く佳良の響きを生ずるものとす。

然し中音と高音とは例外として一度一八音以上の間隔をとることを得るものにして，一八音を超ゆるや直に一八音以内の距離に入るを要し，繼續して離るることを許さざるものなり。進行を許容せられ得べき一例下の如し。

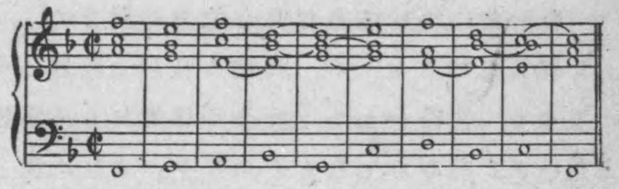
323.



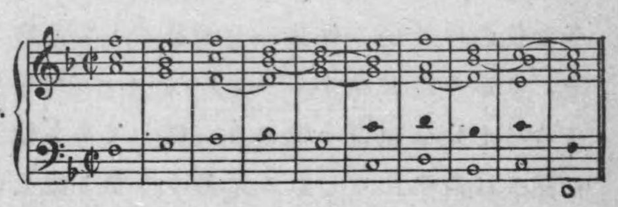
低音と次中音との距離は一八音以上に遠く離るることを以て敢て不可なりとせざるものなれども，長

く繼續して大なる距離にあらしめざるを可なりとす。第三百二十四例の如く始終を通じて大なる隔りを有するものよりも，第三百二十五例の如く低音の全部若くはその前半一部分を一八音上方に移すことによつて，より良き結果を生せしむるを得。

324.

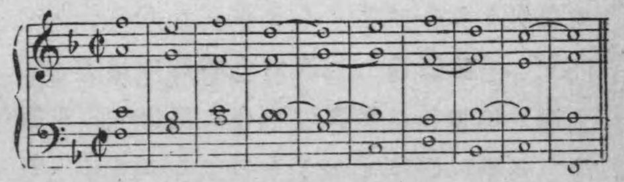


325.



第三百二十五例をして尙一層佳良の結果あらしめんには，次例の如く中音を一八音下行せしめて次中音とし，次中音をそのまま中音たらしむるにあり。

326.



第二節　合唱曲に關する原則

ここに合唱曲の組成につき最も緊要なる原則を示

し，これが解明を試むべし。

1. 歌ふべき聲音は甚だ高き或は甚だ低き位置に長く繼續して進行せしめざること。

2. 個個の合唱聲音をして互に遠く離れしめざること。

合唱曲に於ける甚だ高き位置の聲音は，ピアノ即ち弱又はピアニッスィモ即ち最弱を困難とするのみならず，音程をして不安全不確實にして動搖を免れしめざる虞あらしむるものなり。これに反して甚だ低き位置に於ける聲音は，優勢にして豐富なるフォーテ即ち強又はフォーティッスィモ即ち最強を發するに十分ならざる憾あり。概して高き位置の聲音は強又は最強たらしむるに易く，低き位置の聲音は弱又は最弱たらしむるに易きものとす。而して合唱曲の聲音を互に離れて位置せしむるときは，その各聲音は互に扶持することなくして，融合せる合唱聲の色彩をあらはすことを得ざるものなり。

第三節　四六の和音の用法

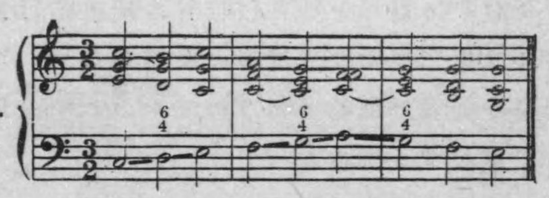
四六の和音は轉調の場合に現出し，小節の下拍部即ち強部に位置すべきものなることは，既に第十三章第三節に述べし所なり。加之四六の和音は最も屢終止の構成に使用せらるるものにして，この場合に

ありても等しく小節の下拍部に位置し，轉調の際に於けるが如く何等の準備なく自由に現出して，吾人に常に終止の感を與ふるものなり。若し終止以外の場合に於て小節の上拍部即ち弱部にこの四六の和音を使用せんとするには，一の經過和音の形體と性質とを帶ばしめ，次の二條件を同時に充たさしむることを要するものとす。

1. 四六の和音の低音の第四度即ち根音を豫備すること

2. 四六の和音の低音即ち根音の第五音を前和音より順次的に進ましめ，次續すべき新和音に向つても尙ほ且つ順次に進行せしむべきこと

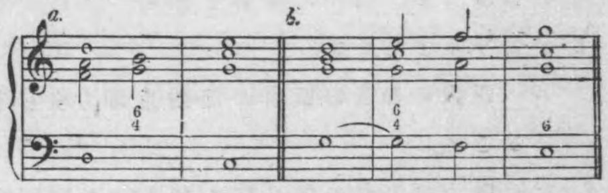
327.



調の主音・屬音及び下屬音上に構成せられたる四六の和音は最も自然的のものなれども，其他の音度上に構成せられたる四六の和音は轉調の感を起さしむるものなり。四六の和音はまた前記の二條件の外に，その低音を豫備したる場合にも現出せしむるを得る

ものにして，これが上拍部なるときは經過和音の性質を有し，(a) 下拍部なるときは繫留の性質を有す。(b) 而して下拍部の四六の和音に對し低音即ち根音の第五音に豫備を存せしむるときは，孱弱なる結果を呈するものたるを免れざるものとす。

328.



第四節　各聲音部の進行し得べき音程

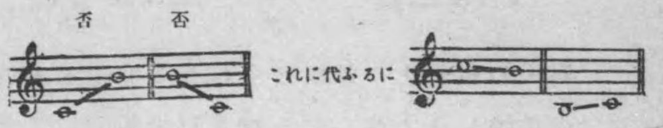
高音は概して最も自由なる進行をなし，中聲は概して平靜なる進行をとり，低音は順次進行をなすと同時に二度·三度·四度·五度等の跳越をなし，又稀に一層大なる音程の跳越を行ひ得るものとす。以下項を分ちて詳說する所あるべし。

A. 完全音程の跳越進行は上行下行ともにすべて許さる。ただ完全八度の跳越は普通多く低音に使用せらるる所のものなれども，稀には高音に現はれ甚だ稀に中聲に起ることあるものとす。

B. 長音程の進行は概して許さるべきものなれども，獨り長七度の跳越のみは下行上行ともに之

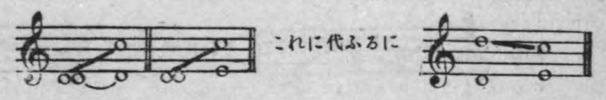
を禁せらるるものにして，これに代ふるに其の轉回音程たる短二度の進行をとらしむべきものとす。

329.



C. 短音程の進行は概して許さるべきものなれども，獨り短七度の上行のみは根音の豫備せらるる場合，即ち三和音にその第七音を添加する場合に限りこれを許され，二つの異なれる和音に際して許されざるものなり。故にこの場合には短七度に代ふるに，その轉回音程たる長二度の進行をとらしむべきものとす。

330.

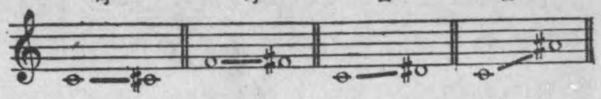


注意　短七度の下行跳越は同一の和音にありても之を使用せざるを可とす。

D. すべての增音程はその進行を禁せらるべきものにして，これに代ふるに其の轉回音程を使用すべきものとす。ただ增一度のみは同音の半音階的進行に外ならざるものなるを以て，その進

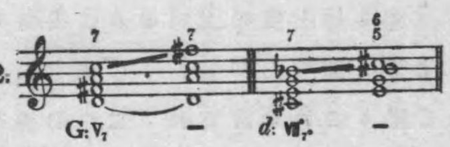
行の許さるべきこと明白なり。

331.



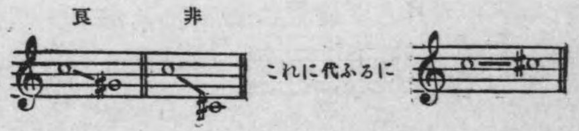
同一の根音上に構成せられたる和音に於て，音の轉換により生じたる增音程の進行はこの規則の例外に屬し，許容せらるべきものなり。

332.



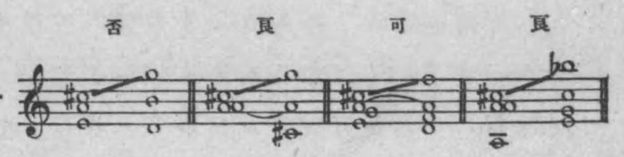
E. 減音程の下行は全く許さるべきものなれども，減八度の跳越に代ふるに增一度を用ふべきものとす。

333.



而して減音程の上行はその音程が結合さるべき兩和音の要素たるべき場合，即ち主として兩和音の根音が同一なる場合に限り多く使用せらるるものなれども，外聲に於ける導音より進んで主和音の第三音に上行する減四度の進行は，格外に許さるべきものとす。

334.

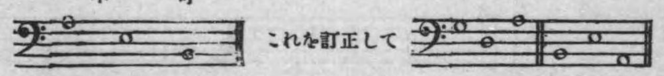


注意　最後の例は一見上述の規則に反するが如くなれども，減七の和音の第七音たる變ロ音をイ・嬰ハ・ホの三和音に連結せしむるときは根音イの第九音に當り，イを根音とする九の和音と見ることを得べきを以てこれを良としたるものとす。

F. 低音の進行に關しては特に次の諸項に注意するを要す。

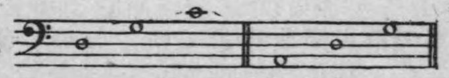
1. 四度の跳越による下行を二回連續せしむべからず。

335.



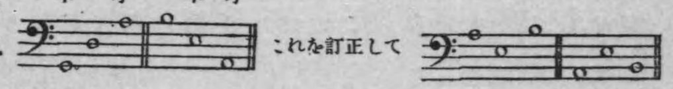
2. 完全四度による跳越上行の連續は，躊躇なくこれを使用することを得。

336.



3. これに反し五度の跳越進行の連續は，上行下行ともに何れも注意して避くべきものとす。

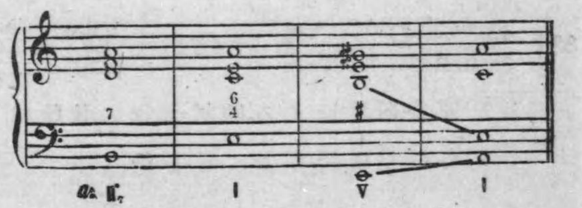
337.



第五節　反進行による並行五度及び並行八度

反進行による並行五度及び並行八度は，並進行の場合の如く甚だしき不結果のものならざることは既に述べし所なり。殊に並行五度は他の聲音部の進行が自然的にして正當なるときは，反進行のために緩和輕減せられ，すべての聲音部に於て許容せらるるものとす。第三百三十八例の三小節より四小節にうつる次中音と低音との進行の如きは一流の名家の作品中に見る所のものにして，躊躇なく使用せられ得るものとす。

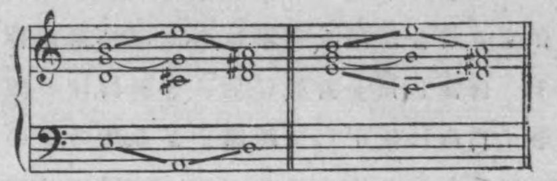
338.



されど二聲の樂曲に於ては，一般に禁せらるべき空虛の五度を生ずるに至るを以て，この進行を許容せられざるものなり。四聲若くは三聲の樂曲にありては，この進行はたとへ外聲の間にありてもなほ許容せらるるものなることは，下例に示すが如きものとす。

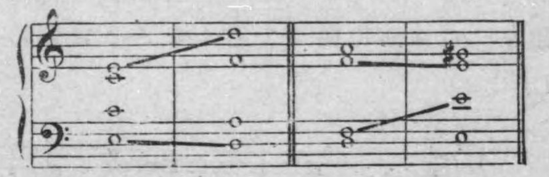
四聲の樂曲　　三聲の樂曲

339.



これに反し反進行による並行八度は，反進行のために緩和せらるることなきものにして，屬和音より進んで主和音に進行する場合の外は，決して許容せられざるものなり。故に下例の如き進行は誤謬として禁止せらるべきものとす。(第四章第一節第四項參照)

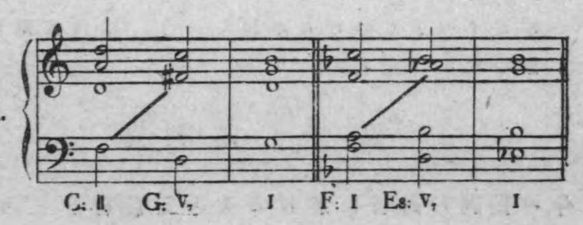
340.



第六節　對斜

對斜は一聲音部の或る音が半音階的の變化をなして他の一聲音部に直接に進行する場合に起るものなり。

341.



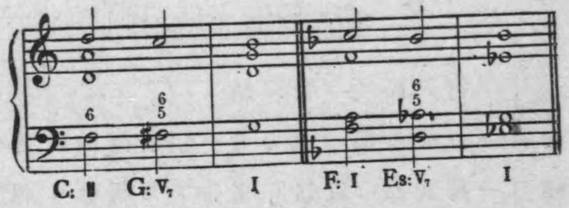
一の定旋律と同一の歴時を有する音が對聲音として存する場合に起る對斜は不良の結果を伴ふものにして，修飾したる對聲に於ける對斜は一流の作曲家も全く自由に使用して躊躇せざる所のものなり。而して轉調を構成する場合または短歴時の音符の間に起る對斜も，概して許容せらるべきものなりとす。

對斜の誤謬を避くる方法としては

自然音と半音階的の變化音とを常に同一の聲音部に位置せしむべし

との一則によるべきものとす。今第三百四十一例の誤謬をこの法則に從つて避くるときは下の如くなるべし。

342.

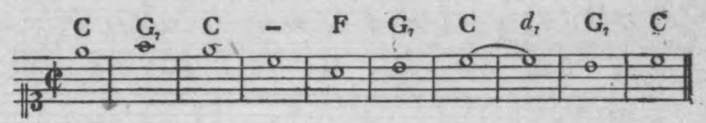


注意　對斜に關する精細なる研究は對聲學に於てこれをなすべきものなるを以て，ここには唯簡明なる記述をなすに止めん。

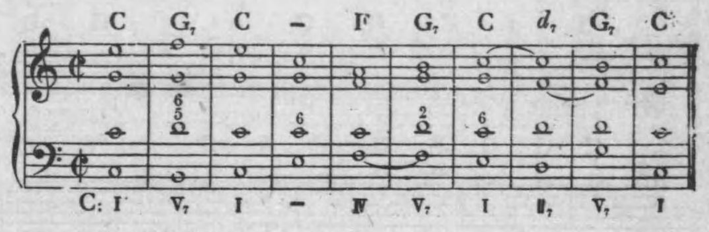
第二十九例題

今ハ長調の高音に於ける次の定旋律をとり，再び

これに伴音を附する實例を示すべし。

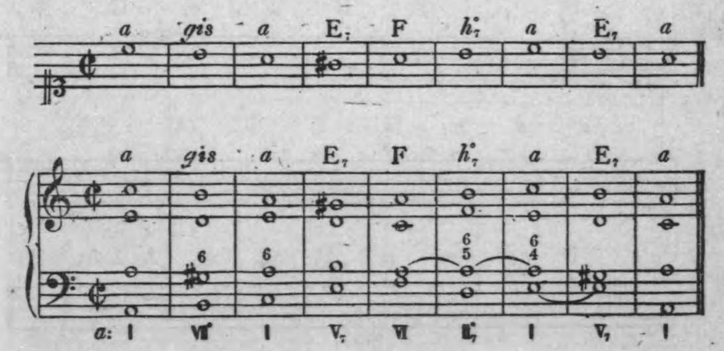


先づ定旋律の上に記されたるアルファベットによりて低音の進行を定め，次に中聲を加ふるときは下の結果を得。



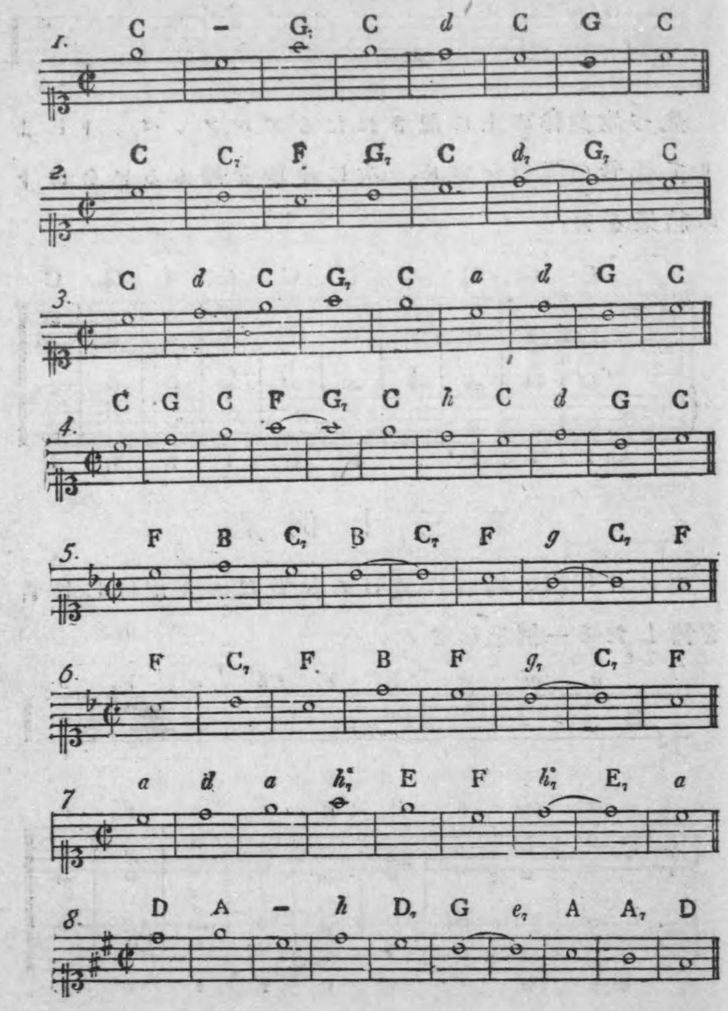
第三十例題

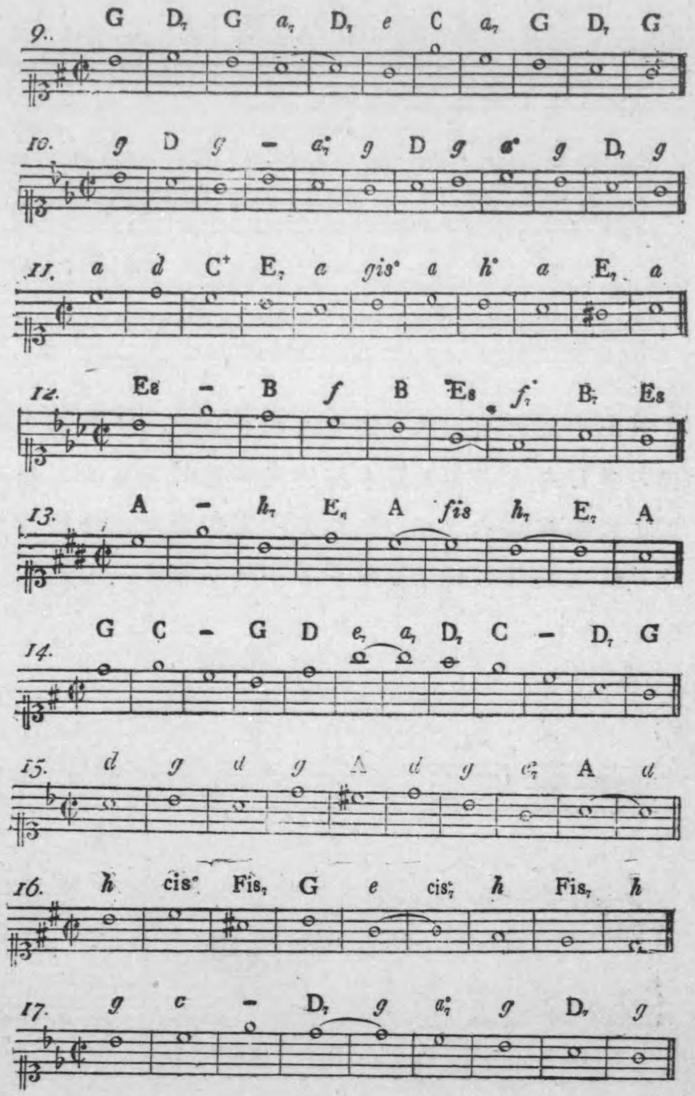
更にイ短調の高音に於ける簡單なる定旋律に伴音を附したる一例を示さん。

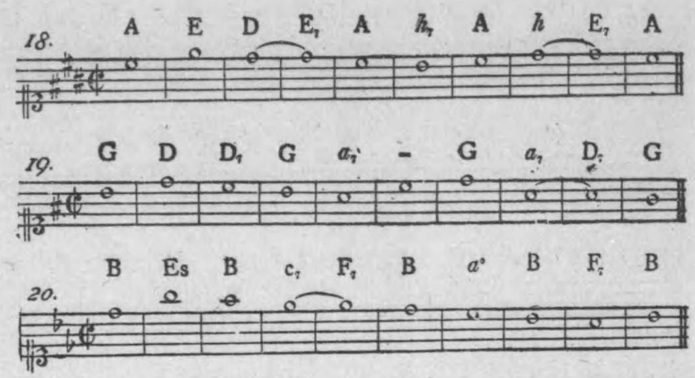


第十九課題

（高音を與ふ）

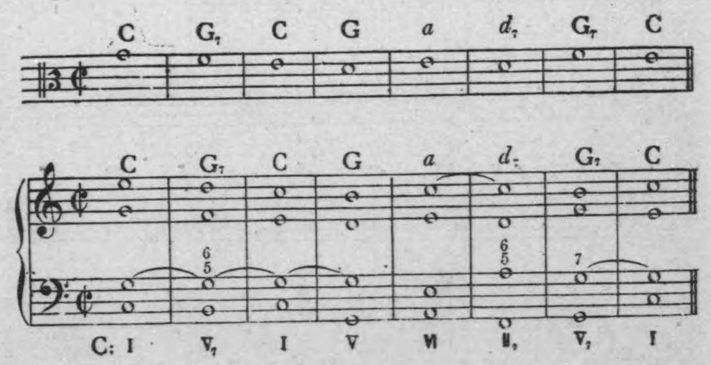

1. C – G7 C d C G C
2. C C7 F G7 C d7 G7 C
3. C d C G7 C a d G C
4. C G C F G7 C h C d G C
5. F B C7 B C7 F g C7 F
6. F C7 F B F g7 C7 F
7 a d a h7 E F h7 E7 a
8. D A – h D7 G e7 A A7 D


9. G D7 G a7 D7 e C a7 G D7 G
10. g D g – a7 g D g a g D7 g
11. a d C+ E7 a gis a h a E7 a
12. Es – B f B Es f7 B7 Es
13. A – h7 E7 A fis h7 E7 A
14. G C – G D e7 a7 D7 C – D7 G
15. d g d g A d g e7 A d
16. h cis Fis7 G e cis7 h Fis7 h
17. g c – D7 g a7 g D7 g



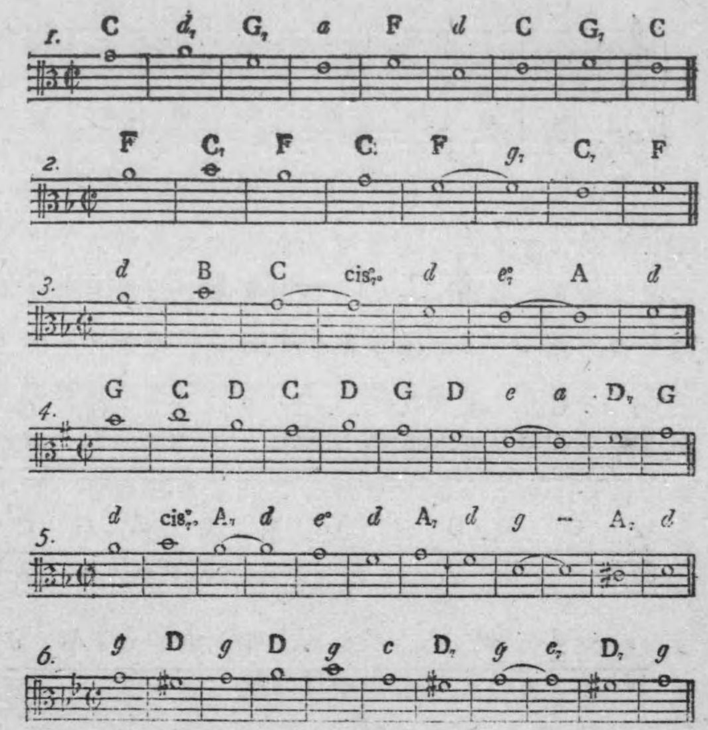
若し中聲に定旋律を存する場合には，上聲即ち高音の進行をして能ふ限り旋律的の進行をとらしむることに顧慮すべきは，既に述べし所なり。今中音に於ける定旋律に伴音を附する一例を示すべし。

第三十一例題



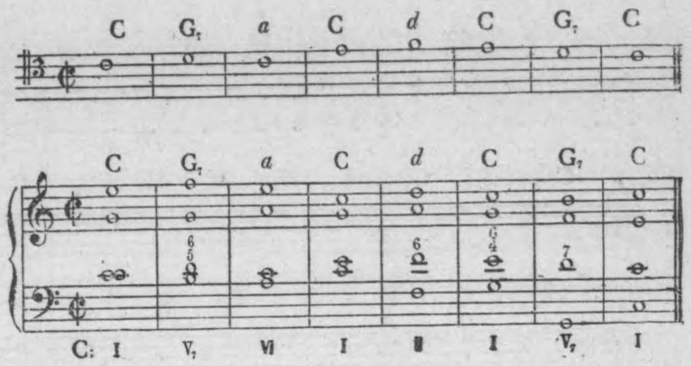
第二十課題

（中音を與ふ）



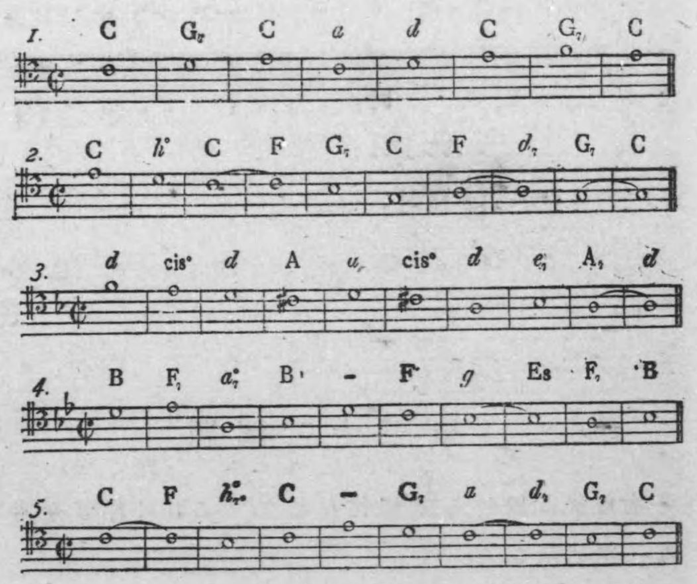
第三十二例題

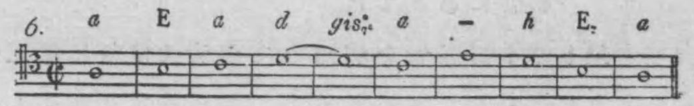
次中音に於ける定旋律をとり，これに伴音を附する一例を示さん。



第二十一課題

(次中音を與ふ)





第十七章　三聲部及び二聲部の樂曲

四聲部の樂曲は完備せる形體を有し和聲的の連合を行ふに容易なるものなれども，三聲部の樂曲は和聲上時に完備せざる結果を生じ，聲音の處理に關してもまた相當の熟達と注意とを要し，二聲部の樂曲は和聲的の關係に於ける大なる缺乏のために，對位的以外の練習に於ては稀に適當するに過ぎざるものとす。今簡單にそれらの構成に關する概要を說述すべし。

第一節　三聲部の樂曲

三聲音より成る樂曲は主として三和音に基き構成せらるるものなれども，聲音進行の處理上時には三和音中の或る音を省略して或る他の音を重複することを要し，七の和音にありては必然的に或る一音を省き，又は甚だ稀に或る二音を省きて或る他の一音を重複することを要するものなり。下に其の要項を摘記すべし。

a.　三和音にありては

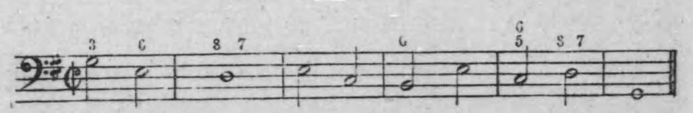
最も多く第五音を省略して根音又は稀に第三音を重複することあるべく，稀に根音を省略して第五音又は第三音を重複することあるべし。而して小節の上拍部即ち弱部に經過的にあらはるるときにありては，聲音處理の必要上第三音を省略することを得るものとす。

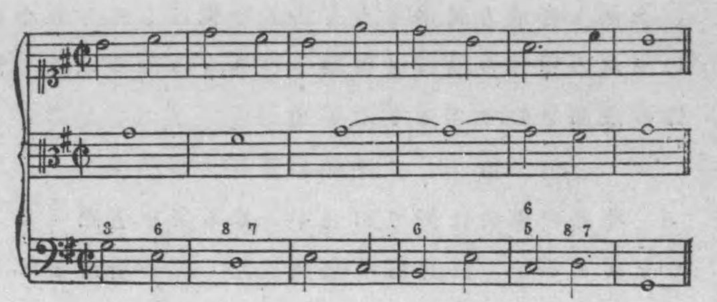
b.　七の和音にありては

四聲部の樂曲に於けるが如く第五音を最も多く省略すべきものにして，根音これに次ぎ，第三音の省略せらるること稀なり。而して第七音の決して省略すべからざるは，四聲の樂曲に於けるに等しきものとす。如何となれば第七音は七の和音を表示するに緊要にして，第三音は音程の種類を決定するに重要なるものなればなり。

第三十三例題

與へられたる低音に基き三聲音の樂曲を構成したる一例を示すべし。

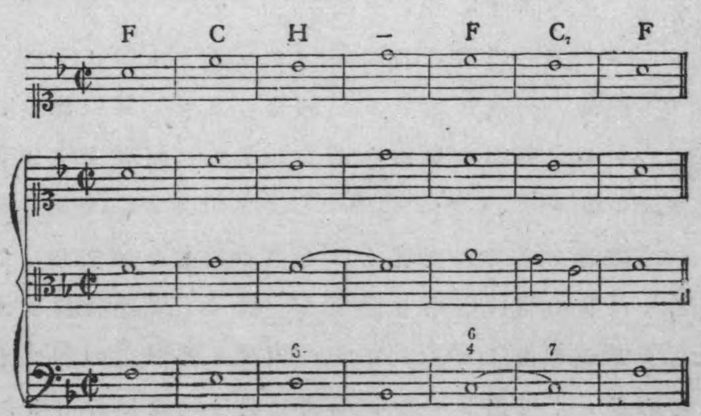




上例は最も簡明なるものの一例にして，殆ど三和音のみより成り何等の説明を俟たずして明に了解することを得。

第三十四例題

今更に高音に於ける定旋律に基き，三聲音の樂曲を構成したる一例を示さん。



上例も亦最も簡明なるものの一例にして，五小節の四六の和音の根音を省略されしものたる以外，何等の説明を要せざるものとす。

第二節　二聲部の樂曲

二聲部の樂曲に於て和音中の或る音を省略することを要するは，三聲部の樂曲に比して一層必要なること明白なり。

a. 三和音にありては

最も第五音を省略し，根音これに次ぎ，第三音は樂曲の始め又は段落の終りに於て同音の關係を保つ場合に省略せられ，且つ聲音處理の關係上小節の上拍部に於て省略せらるることあるものとす。

b. 七の和音にありては

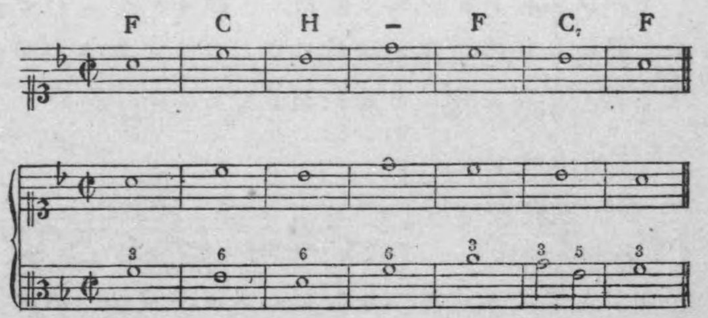
第七音を絶對に省略すべからざるものたるは三聲部の樂曲に於けると同樣にして，其の他の音も亦三聲部の樂曲の場合に準じ，處理すべきものとす。

二聲音をして八度若くは五度の距離を保たしむるときは其の間に空所を生ずるを以て，この音程を使用すること稀なるものとす。四度も亦四六の和音を規則正しく現出せしむる場合に於て，或は若しも四

六の和音を二の和音の代りに現出せしむる場合に於て，唯稀に使用せらるる所のものなり。而してこの四六の和音はその第三音を缺けるものたるは，下例に示したるが如きものとす。

343.

第三十五例題



上例は與へられたる高音の定旋律に基き，二聲部の樂曲を構成したるものの一例なり。四小節はヘ長調の四度上の三和音の根音を省略したるものとも，また六度上の三和音の第五音を省略したるものとも考ふるを得べし。五小節は一度上の三和音の根音を省略したるもの，六小節の第一の和音は二度上の三

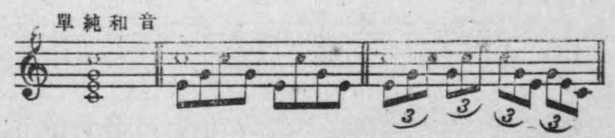
和音の第五音を省略したるものとも，また五度上の七の和音の根音幷に第三音を省略したるものとも見ることを得，第二の和音は五度上の七の和音の根音幷に第五音を省略したるものなること明かなるべし。

第十八章　彩裝伴音

單一に構成せられたる和音中の音を和聲的に分ち，又は和音を單に等時的に割き，或は旋律的に修飾して興趣を添へんとするものを彩裝伴音といふ。

單純なる和音中の音を分割して繼續的にこれを奏し，然かも其の諸音を同時に奏したるが如き調和の感を與ふる彩裝伴音を分割和音といふ。

344.



和音を單に等時的に分ちたる彩裝伴音の一例は下の如きものとす。

345.

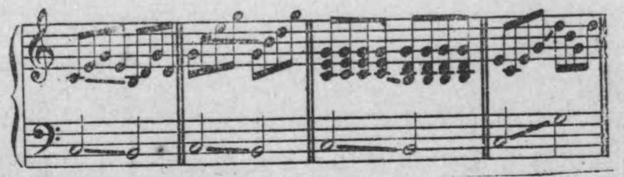
和音中の各音を分ちて其の間に經過音・轉過音及び補助音を挿入し，以て旋律的に彩られたるものの一

例を示すべし。

346.

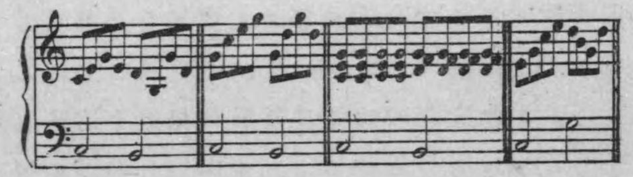
彩裝伴音の構成に於て和音の分割に際し異なれる和音に移る場合に，和聲上定められたる聲音の進行及び和音の解決を妨げ，或は並行五度・並行八度を生せしむるが如きことなからしめんを要するものとす。故に下に示すが如きは不良の進行として許容せられざるものなり。

347.



これを次の如く改むるときは，正當にして誤謬なき結果を得るに至るべし。

348



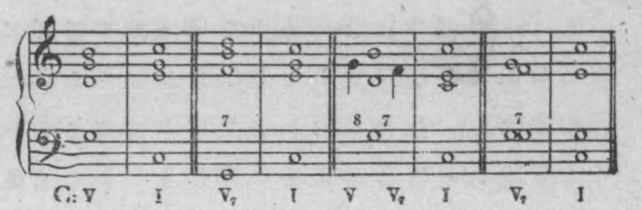
第十九章　終止法

終止法に就ては曩に第四章第二節及び第九章第一・第二節に於てその概要を解明したりと雖も，今ここに本書の卷を終へんとするに當りその全般にわたり更に說述する所あらんとす。樂曲の結尾に使用せらるる終止形に種種あるものなれども，先づ正格終止と變格終止との二者を釋明し，順次その他の終止形に移つてこれを究明すべし。正格終止は變格終止に比し完全なる終止の感を喚起するものなるを以て最も多く使用せられ，變格終止は十分なる終止の感を惹起するに足らざるものにして稀に使用せらるる所のものなり。

A. 正格終止は五度上の和音と一度上の和音とにより形成せらるるものにして，五度上の和音は三和音たると七の和音たるとを問はずともに使用せらる。而して正格終止は終止形中最も完備したるものにしてこれを完全終止と稱せられ，完全終止は更に十分完全終止と不十分完全終止との二に小分せらるるものなり。

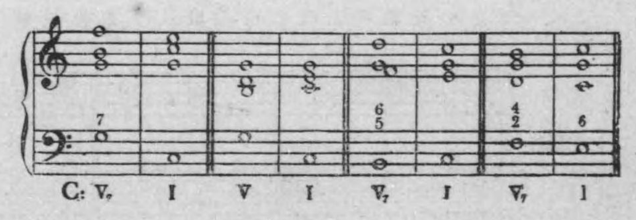
1. 十分完全終止とは低音に根音を有する屬和音若くは七の屬和音より主和音に向つて解決し，解決和音の高音及び低音に於てともに主音を存するものをいひ，

349.



2. 不十分完全終止とは十分完全終止に等しく屬和音若くは七の屬和音より主和音に解決するものなりと雖も，屬和音若くは七の屬和音の低音に根音を存せざるか，或は其の解決和音たる主和音の高音若くは低音に主音以外の音を存するものをいふ。

350.

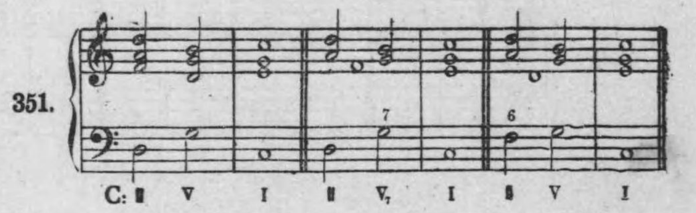


十分完全終止は決定的・確實的の性質を有するものにして，樂曲の段落又は終結を示すに適し，不十分完全終止は多く樂曲の段落を表はすに適するものなれども，或る條件の下に樂曲の終止に使用せらるることあるものとす。

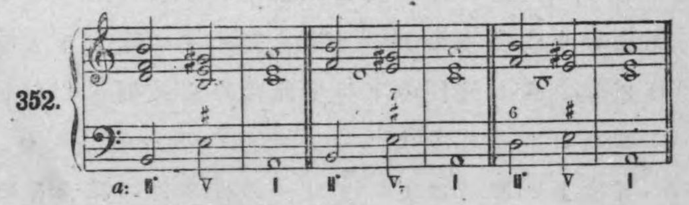
五度上の和音は更にまた一の或る他の和音を豫備

とし，その輔佐により終止を構成するものにして，その豫備とし輔佐として最も自然的のものは二度上の和音なり。如何となれば二度と五度との關係は，恰も五度と一度との關係に等しくして，五度は一度の上方五度若くは下方四度の音なるが如く，二度は五度の上方五度若くは下方四度の音に當るを以てなり。この豫備となるべき二度上の和音は，三和音又は七の和音及びそれらのすべての轉回，何れもこれを可とするものなれども，若し七の和音を使用する場合にありてはその第七音を豫備することを要するものとす。

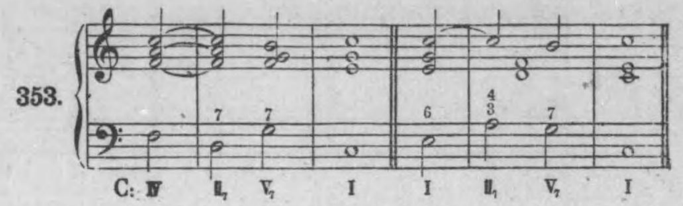
長調の二度の三和音による終止形



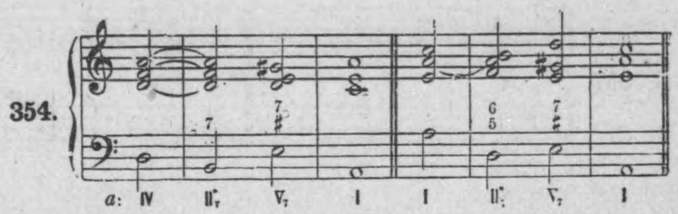
短調の二度の三和音による終止形



長調の二度の七の和音による終止形

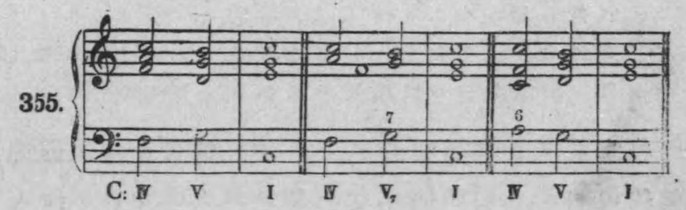


短調の二度の七の和音による終止形



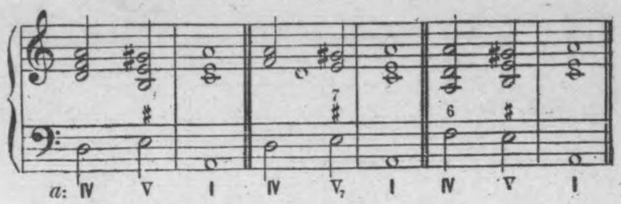
豫備となるべき和音は二度上の和音の外，時として四度上の三和音幷にその第一轉回たる六の和音を使用することあるべく，或はまた稀に四度上の七の和音を使用することあるものなり。其の例下に示すが如し。

長調の四度の三和音による終止形



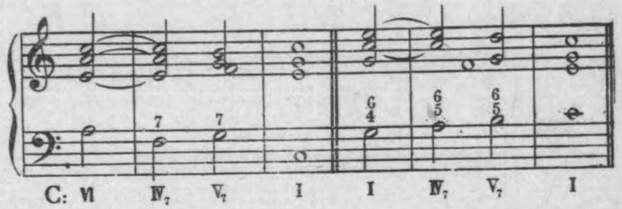
短調の四度の三和音による終止形

356.



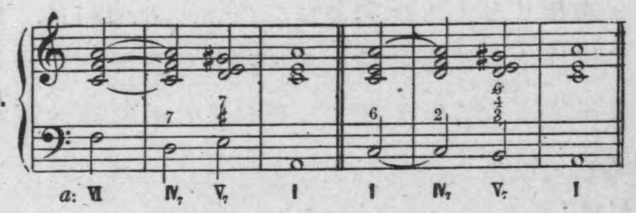
長調の四度の七の和音による終止形

357.



短調の四度の七の和音による終止形

358.



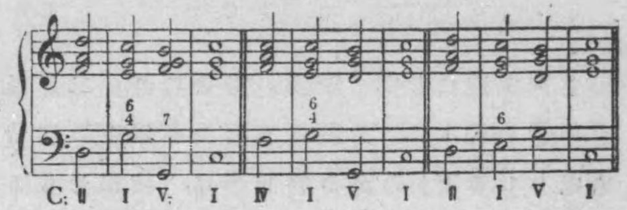
注意　四度上の七の和音は第七音の豫備を設くるも常に鋭き響を與ふるものなるを以て，使用せらるること稀なるものなり。これを連合せんとするに際しては，注意を拂つて處置するを要するものとす。

終止形はまた屬和音とその前に位置せる豫備即ち輔佐の和音との中間に屢一度の四六の和音を挿入し，

また稀に一度の六の和音を挿入することにより構成せらるるものにして，斯る進行の方法を終止的終止法と稱す。

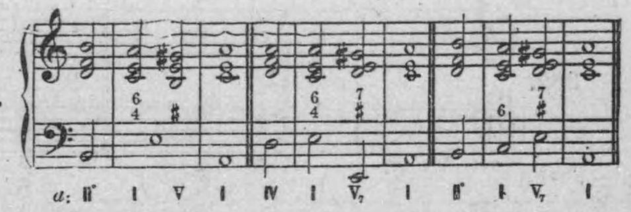
長調の終止的終止形

359.



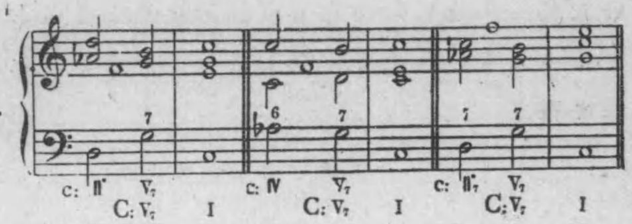
短調の終止的終止形

360.



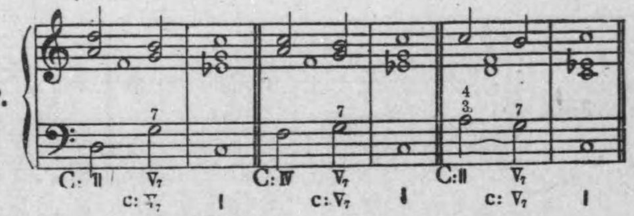
單純なる終止形は上來說述せし方法によりて構成せらるるものなれども，二度及び四度は現調に屬せざる現調に近接せる調のものをも使用し得るものなり。例へばハ長調の二度及び四度の三和音の代りにハ短調の二度若くは四度の三和音を使用し，ハ長調の二度の七の和音の代りにハ短調の二度の七の和音及び二度上の增和音を使用し得るが如し。

361.



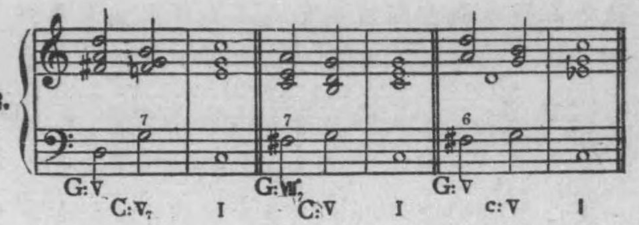
上例を逆にして，短調の場合に其の二度及び四度の和音の代りに，長調の二度及び四度の和音により構成したる下例の如き終止形は，使用せらるること甚だ稀なるものとす。

362.



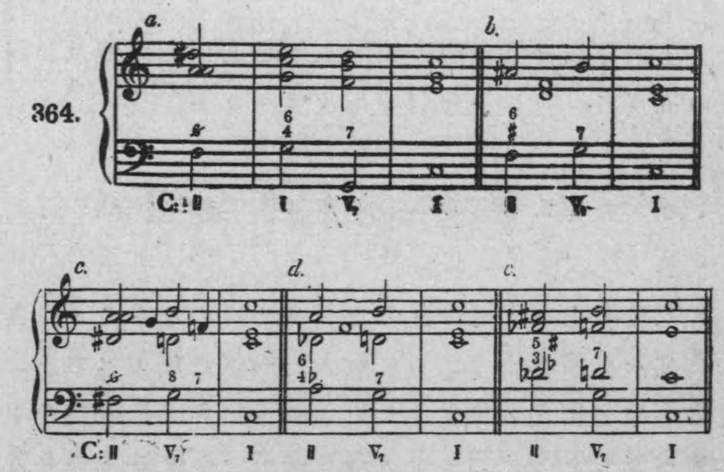
或る調の上屬音の調の第五度及び第七度上の三和音若くはその七の和音幷にそれらの轉回和音は，或る調の屬和音及び七の屬和音の豫備即ち輔佐として使用せられ得るものとす。この場合に於ては最後の例に示したるが如く，短調の主三和音に解決するも滿足なる結果を生ずるものにして，ト長調はハ長調及びハ短調と近接せる關係を有する調なるが故なり。

363.



其の他二度及び四度の和音中の或る一音若くは二音以上に，半音階的の變化を與ふることによりて多種多樣の形に改め，且つ四分音階的の記譜をなすことにより，種種の調の和音として考察することを得るものなり。先づ二度の三和音に於ける二三の例を示すべし。

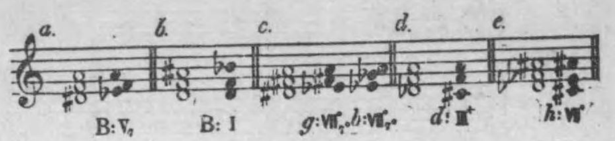
364.



上例を四分音階的に記載するときは，下に示すが

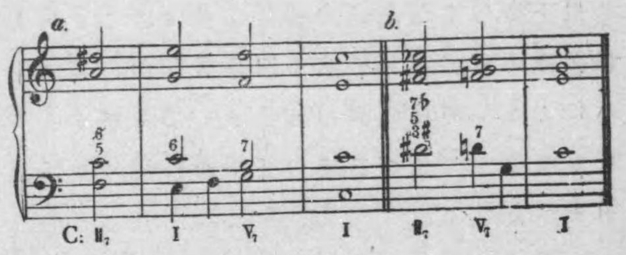
如き諸種の調の和音に當るものなるを見るべし。

365.



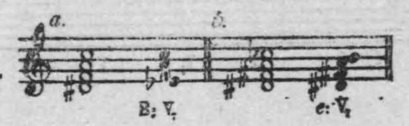
次に二度の七の和音に半音階的の變化を與へたるものの一二の例を示すべし。

366.



上例を四分音階的に記載するときはaは變ロ長調の五度に，bはホ短調の五度に相當す。

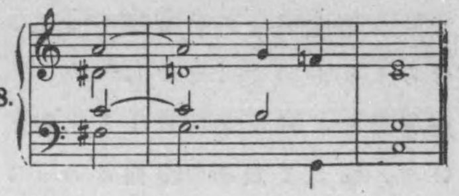
367.



二度の七の和音の豫備を要するものなることは既に述べし所にして，上に説きし一音或はより以上の音の半音階的の變化をなしたる七の和音は，變化を與へざるものに比しより遙に豫備を要するものなるを知らざるべからず。而してここに尙一言附加する

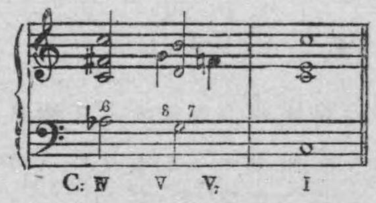
を要するは，繫留の利用により鋭き響を有する種種の和音の連結を中和し得るものなることこれなり。

368.



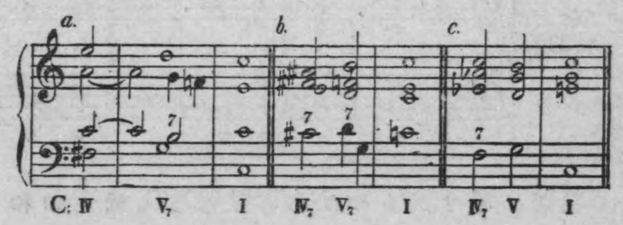
更に四度の三和音及び七の和音の半音階的の變化につき，簡單に釋明する所あるべし。四度上の三和音は二度の七の和音の上部の三聲音より存立するものにして，終止的終止に際し最も屢使用せらるるは增六の和音と稱せらるる形體のものなり

369.



四度上の七の和音に半音階的の變化を與へたるものの一二の例を擧ぐべし。

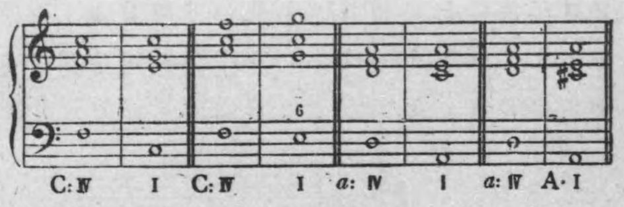
370.



aは繫留を利用したるものの一例，bは三個の音に變化を與へたるものの一例にして，cは七の和音の第三音及び第七音を半音程下行せしめたる，最も屢使用せらるるものを示せるなり。

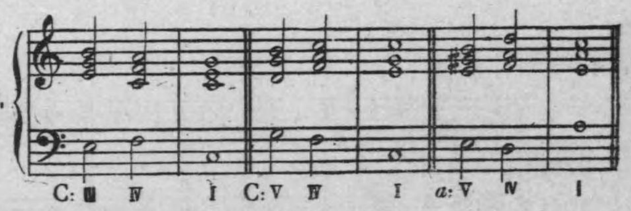
B. 變格終止とは下屬和音より主和音に進行する終止をいふ。而して短調の樂曲にありては屢これを長調に終止せしむることあるものにして，第三百七十一圖の最後の例に於けるが如きものとす。

371.



下屬和音の豫備即ち輔佐として變格終止を構成するに適し最も屢使用せらるるは，其の調の第三度及び第五度上の三和音なり。

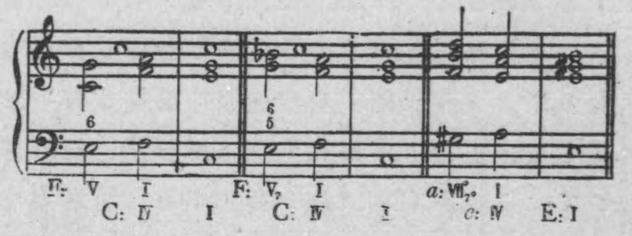
372.



現調に屬せざる和音も亦豫備即ち輔佐の和音として

て使用せられ，下屬調の五度及び七度上の三和音または七の和音これに適するものとす。而して下屬調の五度を豫備とする場合に基本位置の和音を使用するときは，其の結果微弱なる作用を呈するものなるを以て，多くその轉回和音を適當とせらるるものなり。下例に於けるが如し。

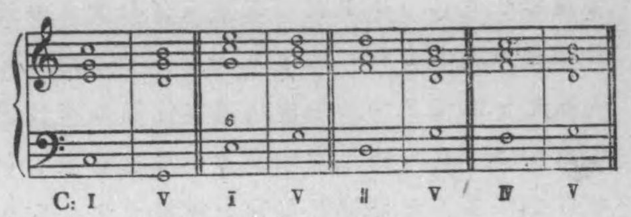
373.



注意　短調の樂曲を長調に終止せしむるを得るものなることは第三百七十一圖に示したる所にして，上の最後の例も亦それに倣ひたるものなり。而して上例を若しホ短調に終止せしむるとも，敢て不正の結果を生ずるものにあらざること勿論なり。

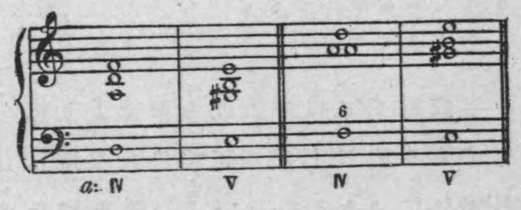
C. 半成終止とは一の或る和音より進んで屬和音に終止するものにして，正格終止を逆にしたると同樣の形體をなせるものをいふ。半成終止は樂曲の終結を表はすべきものにあらずして，次に發し來るべき和音を想察せしめつつ暫時の靜止を與ふるものなりとす。

374.



半成終止中格段に顯著なる結果を生じ且つ屢顯出するものは，フリギヤ終止と稱せらるるものなり。フリギヤ終止とは古く小亞細亞半島の西部中央に位せる，フリギヤ國の敎會音樂の旋律に特有せる終止にして，短調の下屬和音より屬和音に進行する終止とす。この終止はこれを巧に準備し用意して使用するときは，稀にこの終止特有の强銳の作用を失はしむることを得るものにして，屢敎會音樂の終止に使用せらるることあるものとす。

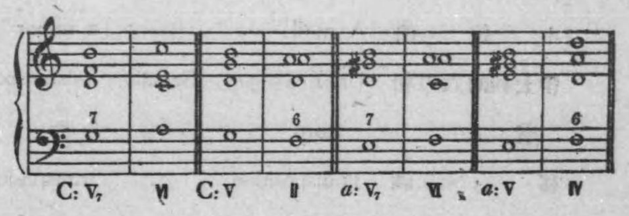
375.



D. 阻碍終止とは屬和音若くは七の屬和音より進んで，主和音以外の三和音に解決するものをいふ。蓋し屬和音より主和音に進行することは，解決の自

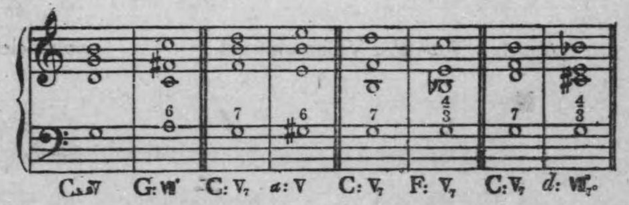
然的傾向として期待せらるる所のものなり。然るに阻碍終止はその趨向に反して更に別種特異の新想を惹起せしむべき本質を有し，樂曲の終結を表はすに適せざるものにして，實際は完全終止を遲延したるものに外ならざるなり。故に樂曲の最終の樂句に於ては必ず正格にして完全なる終止を顯出し，以て安靜にして完備せる終止の感を起さしむることを要するものとす。

376.



現調に屬せざる他調の和音に進んで解決することを得るものなり。リヒテルの擧げし例をかりてここにこれを示すべし。

377.



終

術語一覽

ア

(術語)	(獨語)	(英語)
アンティフォン	Antiphonie	antiphon
アラビア數字	Arabische Ziffer	arabic numeral
アルファベット	Alphabet	alphabet

イ

イ短調	A moll	a minor
伊太利的六の和音	Übermässiger Sextakkord	italian sixth
移調	Transposition	transposition
イ調短音階	A moll Tonleiter	a minor scale
隱伏五度	Verdeckte Quinte	hidden fifth
隱伏八度	Verdeckte Octave	hidden octave

ウ

ヴァイオリン記號	Violinschlüssel	violin clef

エ

嬰	Kreuz	sharp

鋭和音	Harter Dreiklang	major triad
エルンスト・フリードリッヒ・リヒテル	Ernst Friedrich Richter (1808–1879)	

オ

音階	Tonleiter	scale
音樂總論	Allgemeine Musiklehre	
音樂的韻節	Musikalisches Metrum	musical metre
音程	Intervall	interval
音調的反復進行	Tonische Sequenz	tonal sequence
音部記號	Schlüssel	clef
音域	Umfang	compass

カ

解決	Auflösung	resolution
解決音	Auflösungston	tone of resolution
開離位置	Weite Lage	open position 又は dispersed ——又は extended ——
高音	Sopran	soprano
高音部記號	Sopranschlüssel	soprano clef
下行	Absteigung	descension

樂曲	Tonstück	musical piece
下屬音	Unterdominante	sub-dominant
下屬和音	Unterdominant-Dreiklang	subdominant triad
下中音	Untermediante	sub-mediant
合唱曲	Chorsatz	chorus
下拍	Thesis	thesis
間	Zwischenraum	space
カントゥス・フィルムス	Cantus firmus	cantus firmus

キ

器樂曲	Instrumentalsatz	instrumental writing
基礎音	Grundton	fundamental tone
規則	Regel	rule
基礎低音	Generalbass	thorough bass 或は figured bass
强部	Schwerer Taktteil	accentual part

ク

九の和音	Nonenakkord	chord of the ninth
九の屬和音	Dominantseptnonenakkord	dominant chord of the seventh and ninth

グレゴリー	Gregor	Gregory
外聲	Äussere Stimme	outer voice
和音	Akkord	chord
和音の連合	Akkordverbindung	connection of the chord
和音の位置	Lage des Akkordes	position of the chord
和聲	Harmonie	harmony
和聲學	Harmonielehre	manual of harmony
和聲學家	Harmonist	harmonist
和聲的	Harmonisch	harmonic
和聲的進行	Harmonischer Gang	harmonic course
和聲的短音階	Harmonische Molltonleiter	harmonic minor scale
和聲的伴音	Harmonische Begleitung	harmonic accompaniment
關係調	Beziehentliche Tonart	relative key
完全音程	Reines Intervall	perfect interval
完全和音	Vollständiger Akkord	perfect chord
完全協和音程	Vollkommene Konsonanz	perfect consonance
完全終止	Ganzschlus	perfect cadence

ケ

經過音	Durchgangsnote	passing note

經過和音	Durchgehender Akkord	passing chord
繫留	Vorhalt	suspension
結合	Verbindung	connection
結尾	Abschluss	close
協和音程	Konsonierendes Intervall	consonant interval
減音程	Vermindertes Intervall	diminished interval
減三和音	Verminderter Dreiklang	diminished triad
減七の和音	Verminderter Septimenakkord	chords of the diminished seventh
原調	Ursprüngliche Tonart	original key

コ

後打	Nachschlag	after note
五聲音	Fünfstimmig	five part
弧線	Krummer Strich	curve line
ゴットフリード・ウェーベル	Gottfried Weber (1779－1839)	
根音	Grundton	fundamental tone 或は root
五六の和音	Quintsextakkord	chord of the sixth and fifth

サ

彩裝伴音	Figurierte Begleitung	figural accompaniment

三和音	Dreiklang	triad
三五六の和音	Terzquintsextakkord	chord of the sixth, fifth and third
三四の和音	Terzquartakkord	chord of the fourth and third
三四六の和音	Terzquartsextakkord	chord of the sixth, fourth and third
三聲音	Dreistimmig	three part
三聲の樂曲	Dreistimmiger Satz	three part writing
三全音	Drei Töne	tritone

シ

主音	Tonika	tonic
主和音	Tonischer Dreiklang	tonic triad
主三和音	Hauptdreiklang	primary triad
主七の和音	Hauptseptimenakkord	primary chord of the seventh
主七の屬和音	Dominanthauptseptimenakkord	primary chord of the seventh on the dominant
主終止	Hauptschluss	principal cadence 又は primary cadence
四聲音	Vierstimmig	four part
四聲の樂曲	Vierstimmiger Satz	four part writing

自然的解決	Natürliche Auflösung	natural resolution
自然的短音階	Diatonische Molltonleiter	diatonic minor scale
七の和音	Septimenakkord	chord of the seventh
七の屬和音	Dominantseptimenakkord	dominant chord of the seventh
七の導和音		chord of the seventh on the leadingtone
次中音	Tenor	tenor
次中音部記號	Tenorschlüssel	tenor clef
實際的和聲學	Praktische Harmonielehre	manual of practical harmony
十一の和音	Undecimenakkord	chord of the eleventh
十三の和音	Terzdecimenakkord	chord of the thirteenth
十分完全終止	Vollkommener Ganzschluss	complete perfect cadence
四分音階的	Enharmonisch	enharmonic
進行	Fortschreitung	progression
眞正的反復進行	Wesentliche Sequenz	real sequence
上行	Aufsteigung	ascension
上主音		super-tonic
上屬音	Oberdominante	superdominant
上拍	Arsis	arsis

弱部	Schwacher Taktteil	unaccented part
斜進行	Seitenbewegung	oblique motion
斜線	Schräglinie	oblique line
日耳曼的六の和音	Übermässiger Quintsextakkord	german sixth
終止	Schluss 又は Kadenz	cadence 又は close
終止形	Schlussformel	closing formula
終止的解決	Kadenzierende Auflösung	closing resolution
終止法	Schluss	cadence
順次	Schritt	step
順次的	Schrittweise	by steps
初學者	Anfänger	beginner
除外例	Ausnahme	exception
四六の和音	Quartsextakkord	chord of the sixth and fourth

セ

聲音部の進行	Stimmenfortschreitung	progression of tones
正格終止	Authentischer Schluss	authentic cadence
小字	Kleiner Buchstabe	small letter
小節	Takt	measure
線	Linie	line

全音階	Diatonische Tonleiter	diatonic scale
全音階的經過音	Diatonische Durchgangsnote	diatonic passing note
全音階的長音階	Diatonische Durtonleiter	diatonic major scale
全音程	Ganzton	whole tone
漸次的	Graduell	gradual
先取	Vorausnahme	anticipation
旋律	Melodie	melody
旋律的	Melodisch	melodical
旋律的進行	Melodischer Gang	melodic course
旋律的性質	Melodischer Charakter	melodical character
旋律的短音階	Melodische Molltonleiter	melodic minor scale

ソ

增音程	Übermässiges Intervall	augmented interval
增五六の和音	Übermässiger Quintsextakkord	chord of the augmented sixth and fifth 或は german sixth
增三和音	Übermässiger Dreiklang	augmented triad
增三四六の和音	Übermässiger Terzquartsextakkord	chord of the augmented sixth, fourth and third 或は french sixth
總分譜	Partitur	score

增六の和音	Übermässiger Sextakkord	chord of the augmented sixth
阻碍終止	Trugschluss	deceptive cadence
屬音	Dominante	dominant
屬和音	Dominant-Dreiklang	dominant triad

タ

第一音	Erster Ton 又は Prime	first tone 又は prime
第一轉回	Erste Umkehrung	first inversion
第一度	Erste Stufe 又は Prime	first degree 又は prime
第一の位置	Erster Lage	first position
第一拍	Erster Taktteil	first beat
第九音	Neunter Ton 又は None	ninthtone 又は none
第九度	Neunte Stufe 又は None	ninth degree 又は none
第五音	Fünfter Ton 又は Quinte	fifth tone 又は quinte
第五度	Fünfte Stufe 又は Quinte	fifth degree 又は quinte
第三音	Dritter Ton 又は Terz.	third tone 又は terz
第三轉回	Dritte Umkehrung	third inversion
第三度	Dritte Stufe 又は Terz	third degree 又は terz
第三の位置	Dritter Lage	third position
大字	Grosser Buchstabe	capital letter
第四音	Vierter Ton 又は Quarte	fourth tone 又は quarte

第七音	Siebter ton 又は Septime	seventh tone 又は septime
第七度	Siebte Stufe 又は Septime	seventh degree 又は septime
第十一度	Elfte Stufe 又は Undecime	eleventh degree 又は undecime
第十五度	Fünfzehnte Stufe 又は Quintdecime	fifteenth degree 又は quintdecime
第十三度	Dreizehnte Stufe 又は Terzdecime	thirteenth degree 又は terzdecime
第十度	Zehnte Stufe 又は Decime	tenth degree 又は decine
第十二度	Zwölfte Stufe 又は Duodecime	twelfth degree 又は duodecime
第十四度	Vierzehnte Stufe 又は Quartdecime	fourteenth degree 又は quartdecime
第十六度	Sechzehnte Stufe 又は Sextdecime	sixteenth degree 又は sextdecime
對斜	Querstand	cross relation
對聲法	Kontrapunkt	counterpoint
第二音	Zweiter Ton 又は Sekunde	second tone 又は sekunde
第二轉回	Zweite Umkehrung	second inversion
第二度	Zweite Stufe 又は Sekunde	second degree 又は sekunde
第二の位置	Zweite Lage	second position
第二拍	Zweiter Taktteil	second beat

第八音	Achter Ton 又は Oktave	eighth tone 又は octave
第八度	Achte Stufe 又は Oktave	eighth degree 又は octave
第四度	Vierte Stufe 又は Quart	fourth degree 又は quarte
第六音	Sechster Ton 又は Sexte	sixth tone 又は sexte
第六度	Sechste Stufe 又は Sexte	sixth degree 又は sexte
導音	Leitton	leading-tone
短音階	Molltonleiter	minor scale
短音程	Kleines Intervall	minor interval
短九の和音	Mollnonenakkord	chord of the minor ninth
短三和音	Molldreiklang	minor triad
短七の和音	Mollseptimenakkord	chord of the minor seventh
單線	Einziger Strich	single line
短調	Moll	minor
段落	Periode	period

ナ

遲怠音	Verzögerung 又は Retardation	retardation
長音階	Durtonleiter	major scale
長音程	Grosses Intervall	major interval
長九の和音	Durnonenakkord	chord of the major ninth

長三和音	Durdreiklang	major triad
長調	Dur	major
注意	Anmerkung	remark
中音	Alt	alto
中音	Mediante	mediant
中音部記號	Altschlüssel	alto clef
中間音	Zwischenton	internote
中間奏部	Zwischenspiel	interlude
中聲	Mittelstimmen	middle voice
重複繫留	Doppelvorhalt	double suspension
重複八音	Verdoppelteoctave	doubled octave

テ

低音	Bass	bass
低音部記號	Bassschlüssel	bass clef
定旋律	Cantus firmus	cantus firmus
低續音	Orgelpunkt	organ-point 又は pedal-point
跳越	Sprung	skip
跳越的	Sprungweise	by skips
條件	Bedingung	condition
轉回	Umkehrung	inversion

轉回和音	Umkehrender Akkord	inverted chord 又は invertible chord
轉回低續音	Umkehrender Orgelpunkt	inverted pedal 又は inverted pedalpoint
轉過音	Wechselnote	changing note
轉屬音	Wechseldominante	
轉調	Modulation	modulation
轉調的	Modulatorisch	modulatory

ト

度	Stufe	degree
同音	Unisonus	unison
等時的	Metrisch	metrical
ト音記號	G Schlüssel	g clef
獨立三和音	Selbständiger Akkord	independent chord
獨立的	Selbständig	independent
ドンメル	Arrey von Dommer (1828—1905)	

ナ

內聲	Mittelstimmen	inner voice
軟和音	Weicher Dreiklang	minor triad

ニ

二四六の和音	Sekundquartsextakkord	chord of the sixth, fourth and second
二聲の樂曲	Zweistimmiger Satz	two part writing
二の和音	Sekundakkord	chord of the second

ネ

ネーブル的六の和音	Akkord der Neapolitanischen Sexte	chord of the Nealolitan sixth

ハ

バウル	Oskar Paul(1836－1896)	
ハ音記號	C Schlüssel	c clef
破格進行	Ausserordentliche Bewegung	exceptional motion
ハ調長音階	C-dur-Tonleiter	c major scale
伴音	Begleitung	accompaniment
半音階	Chromatische Tonleiter	chromatic scale
半音階的經過音	Chromatische Durchgangsnote	chromatic passing note
半音程	Halbton	semi-tone 又は half tone
反進行	Gegenbewegung	contrary motion
半成終止	Halbschluss	half cadence
反復進行	Sequenz	sequence

ヒ

ピアニッスィモ	Pianissimo	pianissimo
ピアノ	Piano	piano
非終止的	Nicht Kadenzierend	non-cadencing 又は connection
非旋律的	Unmelodisch	unmelodious

フ

ファンタズィー	Phantasie	fantasy
フォールテ	Forte	forte
フォールティッスィモ	Fortissimo	fortissimo
副三和音	Nebendreiklang	secondary triad
副七の和音	Nebenseptimenakkord	secondary chord of the seventh
複線	Starker Strich	double line
不完全和音	Unvollständiger Akkord	imperfect chord
不完全協和音程	Unvollkommene Konsonanz	imperfect consonance
フーゲ	Fuge	fugue
不協和音程	Dissonierendes Intervall	dissonant interval
附言	Anhang	appendix 又は addition
不自然的	Unnatürlich	unnatural

不十分完全終止	Unvollkommener Ganzschluss	incomplete perfect cadence
ブスレル	Ludwig Bussler (1838—1901)	
不獨立三和音	Unselbständiger Akkord	dependent chord
譜表	Notenplan	staff
分割和音	Gebrochener Akkord	broken chord
佛蘭西的六の和音	Übermässiger Terzquartsextakkord	french sixth
フリギヤ	Phrygien	Phrygia
フリギヤ終止	Phrygischer Schlüss	Phrygian close
フリードリッヒ・シュナイデル	Friedrich Schneider (1786—1853)	
ブローズィッヒ	Moritz Brosig (1815—1887)	

ヘ

並行五度	Quintenparallele	parallel fifths
並行八度	Octavenparallele	parallel octaves
並進行	Gerade Bewegung	parallel motion 又は similar motion
ヘ音記號	F Schlüssel	f clef
變	Be	flat
變格終止	Plagalischer Schluss	plagal cadence

變化和音	Alterierter Akkord	altered chord

ホ

補助音	Hilfsnote	auxiliary note
保續音	Liegender Ton 又は Ausgehaltene Stimme	stationary note
本位記號	B-Quadrat 又は Wiederherstellungszeichen	natural

ミ

密集位置	Enge Lage	close position

モ

モツァート	Wolfgang Amadeus Mozart (1756—1791)	

ヤ

ヤダゾーン	Salomon Jadassohn (1831—1902)	

ヨ

豫備	Vorbereitung	preparation

リ

理論家	Theoretiker	theorist

理論的和聲學	Spekulative Harmonie-lehre	manual of speculative harmony

レ

例	Beispiel	example
連合	Verbindung	connection
連結	Verbindung	connection

ロ

六の和音	Sextakkord	chord of the sixth
ローマ	Rom	Roma
ローマ數字	Römische Zahle	roman numeral

ワ

横線	Strich	dash

キ

位置	Lage 或は Stellung	position
韻節	Rhythmus	rhythm
韻節的	Rhythmisch	rhythmical

—— 以上 ——

大正拾年壹月拾六日印刷
大正拾年壹月貳拾日發行

定價金參圓五拾錢

著者 福井直秋

發行者兼印刷者 合資會社 共益商社書店
代表者 白井保男
東京市芝區松本町四十四番地

印刷所 合資會社 共益商社書店
印刷部
東京市麻布區新門前町十八番地

不許複製

發行所 合資會社 共益商社書店
東京市芝區松本町四拾四番地
電話 芝 五二七
振替 東京一五八〇

322
283

終

始